
夏色カフェテリア

夏祭 那奈緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏色カフェテリア

【Nコード】

N2844V

【作者名】

夏祭 那奈緒

【あらすじ】

死ぬことのない俺は、気ままに生きる。今の俺は大学で学生やっています。方向性は特にないかな。「先のことを考えるなんて不毛だよ」「悪魔だつてのんびりしたいのさ。」

第一話 Do you understand? (前書き)

初投稿です。

苦手な方は戻るボタンを押して、良作を探しに行くのが吉です。

10/19

新作を出しています。

よろしければそちらもよろしく願います。

第一話 Do you understand?

パツパツと窓から音が鳴る。現状としては、ドブネズミみたいな色をした雲から透明な雨の粒が降っていて、それが見渡す限り、窓の一面を濡らしている。

特に感想はない。

こんなのは生まれてからずっと見ている訳だし、特別雨に思い入れもないからだ。

「 退屈だなあ 」

季節は夏。西暦は エーと、いくつだったかな。忘れてしまった。確か2000いくつだった気がする。違ったかな？

まあ、要するに。あんまり時間というものに興味が無いのだ。だって、長いこと生き過ぎて、そういうことに執着しなくなってしまったから。時計を眺めたって俺自身がどうなるわけじゃないし、ましてや雨が降り止むかどうかなんて……いや、これは違うな。いつか雨は降やむだろうからこの表現は適切ではないか。

いや、失敗。忘れてくれ。

うん、そうだな。結果的に言うと、俺はそこに座っている巨乳のような真つ当な人間ではなく、現実味の感じられない、しょーもない存在であるってことなんだ。だから時間には興味ないし、食事もそこまで気にかからない。いや、きちんと食事はするんだけどね。

でも、人間が食べるような食べ物には俺にとって趣味程度の価値で
さ。それでも味がわからない訳じゃないし、素直に素晴らしいもの
は素晴らしいと思えるぐらいの心は持っているつもり。

つまり俺が何を言いたいかって言うと、俺は何千年も生きている、
化け物なんだよってこと。

ああ、化け物っていつでも種類があるわけだけど、俺は人間が言
うところの『悪魔』ってやつ。人間はだいたい山羊みたいな顔した
サタンを思い浮かべるだろうけど、俺はそういうのとは違うな。あ
れよりももうちょっと親しみやすく、人間が見てもそう不思議に
思わないんじゃないかな？

古株とはいえ、そんなに強いわけでも偉いわけでもなく。ただた
だ、ぼんやりと生きている、そう　人間が言ってた……何だっけ？

ああ、フリーターだ。

うん。フリーターみたいなもんだよ。気ままに歩いて、その時に
したいことをする、ダメ人間……とは違うか。ダメ悪魔というのか
な？

まあ、俺の自己紹介はそんなところか。そこまで言うほどのプロ
フィールがあるわけじゃないしね。

だいたい、悪魔にできることなんて限られているのだから、そう
そう期待してもらっちゃ困る。期待してたのと違うかな？

悪魔なんてそんなもんだよ。せいぜい、人間をたぶらかして魂を

食べるくらいだからね。

そんでもって。今の俺こと望月君は現在、日本で大学2年生をしているわけ。

D o y o u u n d e r s t a n d ?

第二話 Are you all right? (前書)

7 / 28 更新

第二話 Are you all right?

「望月君は将来のこと何にも考えてないの？」

講義が終わってすぐ、彼女は唐突に質問をしてきた。なにやら未来の話のようだ。人間は短い時間しか生きられないからこうやって先のことを思うのかもしれない。

「？ そうだけど？ どうしたの、急に。」

「んー、最近考えるんだよねー、将来のこと。遠くない未来だからかなー？ それとも昨日のテレビのせい？」

「そうなんだ。俺はなるべく未来のことは考えないようにしてるかな」

「先のことを考えるなんて不毛だよ」と言うと、彼女は「だよねー」なんてクスクスと笑って頷いた。

彼女、浅倉さんは美人だ。そこらの店頭に並んでいるモデル雑誌の表紙と比べたって劣らないような顔立ちとプロポーションを保持している。

おまけに性格も悪いわけではないから、彼女の味方は多い。きつとファンがいるに違いない。でなければ、さっきからちらほらと感じる『妬ましい』という視線をどう説明しろというのだろうか。

それはさておき、浅倉さんは続ける。

「でも、ちょっと驚きだなー。望月君って、運動も勉強も出来るし、手先も器用だし、歌もうまいし、料理もうまいし、それでいてカッコイイのに。将来は全く未定なんだ？」

「うん、まあ。これといって目標とか目的って特にないんだよね。それに比べたら浅倉さんこそ頭脳明晰、運動神経抜群の才女じゃないか。浅倉さんはどうなの？」

「あたし？ うーん、あたしもあんまり考えてないかなー。あ、でもゼミをどうするか悩み中だね。就職率の悪い研究室だと苦労しそうだし、院に進むのもどうかあったところだし」

そこまで言っつて、浅倉さんはポケットから携帯を取り出し、耳にあてた。

さっきからブンブンいっていたのはどうやらそれだったらしい。人間はここにきて飛躍的な技術の発展をさせてきているが、一体どこへ向かっているのだろう。何十年か前に月へ行つたかどうかをやっていたが、目的は宇宙進出だろうか。それともあのアニメーションのように時空を超えようとしているのだろうか。謎は深まるばかりである。

そんなことを考えていると浅倉さんの電話が終わった。

内容的にはお見合いの電話であることがわかった。悪魔の耳はこういう小さな音も拾えるのだからよくよく便利だ。ついでに浅倉さんは無表情で「はい」と「いいえ」だけを使って話していたことを報告しておこう。

通話終了後の彼女は、ショートケーキの苺を目の前で父親に食べ

られた時のいらつきを軽く乗り越した顔をしていた。

一言で言えば、ひどく不機嫌な顔である。

「どうしたの？ ショートケーキの苺でも食べられた？」

A r e y o u a l l r i g h t ?

第三話 You too? (前書を)

7 / 29 更新。

第三話 You too?

「うん？ 違うよ、嫌がらせの電話。しつこいからうざったいんだけど、切るに切れない相手なんだよね。あーもー、ホント」

死ねばいいのに、と頂垂れながら浅倉さんは携帯をポケットにしまった。

スラリとした体つきでショート髪の彼女には、今着ているキャミソールとジーパンの組み合わせがよく似合う。見た目の印象を言うなら活発な女子というのだろうか。バスケットボールを持たせたら男子諸君は写真を迷わず撮るだろうし、買っただろう。

「ふうん。タイヘンなんだね、浅倉さん」

「棒読みでそんなことを言われてもしつくりこないよ、望月君。あーそんなことよりお昼、一緒に食べるにいかない？ あたし朝ごはん食べてないからお腹ぺこぺこなんだよね。」

「それは別にいいけど……女子の友達とじゃなくて良いの？」

「うーん、それはなんていうか……あたし、あんまり友達いなくてさ」

浅倉さんは少々照れながら言った。これは意外だ。

「そう？ それはちょっと驚きだな。浅倉さんっていつも囲まれてるからそうは見えないんだけど」

「逆逆。囲まれてるからそれ以上友達は出来ないし、親しくなることも希薄なんだよね。」

なんて言うんだろ……うーん、表面上の付き合いってやつ？

そう、友達つてか、知人っていうのが正しいかもしれないんだよね。みんな珍しいものみたさであたしに近づいてくるから。当然あたしからのアプローチはないよね。まあ、あたしもたまには利用したりするんだけどさ」

浅倉さんは額に右人差し指を置いてうんうん頷きながら言った。

成程。確かにこんな美人で秀才がいたら友達になりたいと近づくと輩は多いのかもしれない。もし浅倉さんが有名人になったら、自分を鼻屑にしてもらおうとでも考えているのだろうか。やれやれ。人間は業が深い。だからこそ人間は騙しがいがあるのかもしれない。人間というものは誘惑に弱い。

「それで昼飯だっけ？ 一緒に食べるのはいいけど どこで？」

現在時間十時半。この時間帯は学食が混む。

すごく混む。

とても混む。

邪魔くさいくらい混む。

「うん。行きつけの美味しい洋食店があるんだけど。一緒に、どうかな？ 望月鷺君」

洋食か。

「いいんじゃない」

最近は洋食食べてなかったし。というか、人間の食事をするのは五日ぶり……だったかな？昨日は昨日で人間の魂食べてたしね。

「よし、決定！ それじゃ早速一緒に」

浅倉さんは妙に嬉しそうにカバンを持って歩きだした。そんなに腹が減っているなら朝から食べてくればいいのに。浅倉さんは頭が良いようでどこかズレているんだなあ。

「ん？ なんか妙な気配がする」「

You too?

第三話 You too? (後書き)

パソコン音痴は辛いです。

第四話 You're driving me crazy! (前書き)

7 / 29 更新。

第四話 You're driving me crazy!

洋食店の名前は『Aliquam Paradise』という素晴らしいネーミングセンスを持ち、店の繁盛を願っていない気持がどくどくと溢れた気持ちの良いものだった。悪魔の俺にとって心地よいこの名前は、人間にとってあまり好まれぬものではなからうか。

大通りのハズレにポツンと建ったこの店は、名前に反して少しは客入りがあるようだ。数人の男性客がにこやかに出てくるので、そこまで荒んでいないかもしれない。

「こんにちは、店長さん。今日は二人です。いつもの席で」

入るなり浅倉さんは席の注文を شدした。ウェイトレスとかはいないのだろうか？

「あら、陽子ちゃん？ 二人だなんて珍しいわね。彼氏？」

「違います。同じ講義を受けている望月君です。あ、店長。エスプレッソ大盛りとサンドウィッチ三つお願いしまーす。それとお手洗いかりまーす」

「はいはい」と店長と思われる見目麗しい、二十代後半らしき姿の女性がオーダーをとる。浅倉さんはツカツカと歩いてカウンターへカバンを置き、店の奥の方へと向かって行った。

なんていうか、学校での彼女とここでの彼女は別人に見える。そ

れだけここが落ち着くのかもしれない。そういえば、ここでオーダーを取るのだろうか？

なら俺もここで。

「つと、そのクソワシ。猛禽風情が何の用だ」

「あん？ そっちの蛇足こそ。こんな穴ぐらで何やってやがる」

「……………」

女は牙をたて、俺は爪を尖らす。

無言で睨み合う俺達。君たちは鳥と蛇は仲が悪いことを知っているだろうか。こうやって対面すると二つの種族の間では喧嘩が勃発するのだ。

十秒ほど経って二人とも元に戻し、己のやることをしだす。女は料理。俺はカウンターへ座る。

「チッ。やっぱりうぜえな猛禽。テメ焼き鳥にすんぞ、コラ」

「客に失礼だろ。うぜえのはそっちだ脱皮野郎。皮剥いで財布にすんぞ、コラ」

「あれ？ 何やってんの、二人とも？」

もう少し浅倉さんの来るのが遅かったら、ここは廃墟と化していたところだろう。

「なんでもないよ、浅倉さん。だそ 店長さんにメニューを聞い

「ただけなんだ」

「ええ、そうよ、陽子ちゃん。くそわ お客さんの注文を聞いて
いただけなの」

「？ そうだったんだ。ごめんね、望月君。あたしここに来るの慣
れてたからすっかり気がつかなかった。あ、店長。望月君をよろし
くお願いします。あたしちょっと電話してきますから」

「「 行つてらっしやい」」

浅倉さんを笑顔で見送る俺と女。顔を見やるとどうもいけ好かな
くて睨み合う。

「……………注文は？」

「……………アイスコーヒーとサンドウィッチ」

You're driving me crazy!

第五話 What does that mean? (前書き)

7 / 3 1 更新

第五話 What does that mean?

浅倉さんが戻ってすぐサンドウィッチが出て、ちょうど良かったので聞いてみる。

「浅倉さんは店長さんとどれくらいの付き合い？」

女がチラリと俺を睨む。

そんなに睨んだって俺は殺気ぐらいしか出せねえぞ。

「うん？ うーん、だいたい一年位かな。大学に入って最初の夏休み直前にこの店を見つけたんだけど。店長さんの料理がすごく美味しくて通い続けてるんだよねー。ね、そうですね、店長？」

「……そうだったわね」

「？ どうしたんですか、店長。さつきから望月君を見て あ。もしかして望月君が気になるんですかあ？」

浅倉さんのニヤニヤした質問に、女が妖艶な微笑みで返答した。

「えっ！？ マジすか!？」

何故か浅倉さんは驚いた。

本来、悪魔は人間を誘い出して食べることから、人を魅了する笑顔は大得意なのだ。しかし、あれはただ単純に俺をどう抹殺しようか考え、笑っているのだらう。なんて腹立たしい女だ。引き裂いて喰っちゃうぞ。

「……さあ。どうかしら」

「うーん。店長の真意が読めない。望月君はどう思う？」

殺し合いなら受けて立つ。ベリベリのチリジリのサラサラの粉々にしてやる。

「俺は一向に構わないね」

「？ 『来るなら来いって』こと？」

「浅倉さん、良い言葉だね。『来るなら来い』良い響きだ。店長さん、来るなら来い」

女の顔を真っ直ぐに見据え、はっきりと言うと、女は紫がかった髪を揺らしてまた綺麗に微笑んだ。

刹那。パキンという音がした。きっとグラスが割れたに違いない。やれやれ、店長のくせに店の備品を壊すとはどういう了見だ。

「あれ？ 店長、今お店揺れませんでした？」

「……あら、そうかしら。気がつかなかったわ。お客さんは？」

「……俺も気がつかなかった」

「うーん。気のせいかなあ。グラスが割る音がしたような気が……」

案外浅倉さんは霊的なものに関して敏感なのかもしれない。学校

を出る前にも不審がっていたからそれは確かだろう。

ちなみに。今は俺と女の殺気のせいである。

「そうそう、店長。彼は『お客さん』じゃなくて望月君です。望月
驚君。望月君、店長さんはエンヴィーって名前なんだって。英系？
ま、あたしは店長って呼ぶけどね」

What does that mean?

第五話 What does that mean? (後書き)

感想とか、叱咤とか、批評とか、むち打ちのような言葉責めがあったら嬉しいです。

第六話 Leave me alone! (前書老)

7 / 3 1 更新

第六話 Leave me alone!

浅倉さんの意図しない自己紹介を受けたおかげで俺達は固まっていた。

そりゃそうだろう。悪魔にとって名前とは命と同じくらいに大事なモノ。いや、真名でなくても名乗るということはとっても大事なことなのだ。

古来より『悪魔』というものは人間らによつて召喚されてきた。召喚自体は特別なことではない。人間にとっては特別なことかもしれないが悪魔にとってはどうでもいいこと。理由としては、単に自分に利益があるからだ。

こういうのは例えるのが一番楽かもしれない。

そうだなあ。君が突然、教師に呼び出され、雑用を頼まれるとしよう。雑用が終わると教師がジューズを奢ってくれる。いや、ジューズでなくて成績をおまけしてくれることでも構わない。

どうだろう。気分は良くなかろうか？

悪魔も同じ理屈で召喚に応じて行動する。召喚者から生命エネルギーをとったり、人間の魂を貰えたりするのだ。

しかし、『服従』は違う。これは悪魔にとって最も忌避しなければならぬことだ。

服従とは召喚者が悪魔の名前を奪い、自身の奴隷とすることで、

悪魔に一切の自由はなくなる。これは一方的な契約だ。名前で縛られたらおしまい。契約者が死ぬ　つまり、真名を知るものがいなくなるまでこき使われるのだ。

いくら時間に興味が無いとはいえ、ふざけた召喚者が契約者になれば悪魔のストレスは溜まる。

こういうわけで、悪魔は名前を大事にする。真名だろうと、偽名であろうと名乗るといふ行為自体が儀式みたいなものなのだ。だから、

「望月　驚、です。忘れてください」

「エンヴィー　と申します。忘れてください」

「「「.....」」」

「こういふ風に気まづくなるのだ。

「ん？　どうしたの二人とも。何で『忘れてください』？」

「「いえ、別に」」

今だけはお互いの気持ち一致した気がする。元々好かない奴ではあるが、それ以前に俺達は悪魔だ。種族なんてこの際二の次、三の次である。

悪魔というものは基本的にルールに忠実だ。だからこそルールの裏をかいて卑怯な勝ち方をしたりするのだが……それはまた別の話。悪魔にとってルールを破ることは自身にとって汚点でしかない。だ

からこそ、

「死にたい」

「えええ。二人ともどうしたの！？いきなり死にたいとか言っちやダメでしょ！強く生きようよ！明日は明日の風が吹くっというじやない！！」

ああ、えと。俺達は君のせいで、揺らいじゃいけないところが揺らいているんだよ？

Leave me alone!

第六話 Leave me alone! (後書き)

感想とか、デコピンとか、ビンタとかがあったら喜びます。

第七話 Give me a break! (前書き)

8 / 1 更新

第七話 Give me a bleak!

「じゃあ店長、あたし帰りまーす」

もう十二分に落ち込んだ俺達はこの一言でやっと希望を持つことができた。

これでこの重苦しい空間から脱することができると思うと体が軽くなる気がする。

「じゃあ俺も帰」

ろつと荷物をまとめようとした俺を、浅倉さんは制止した。

嫌な予感がする。

「どう したの？」

「ダメだって望月君。君はもうちょっとここに居ること。オーケー？」

この娘の思考回路はどうなっているのだろう。脳神経を引きずり出して、あやとりでもしてやりたいくらいズレた女の子だ。

「何で、かな？」

俺はなるべく本性を出さないように微笑む。カウンターの中では、俺と同様に蛇女がニコニコと引きつった笑を浮かべている。

浅倉さんは少したじろいて理由を述べた。

「望月君は店長と仲良くなること！ ギスギスした空気をあたしが気づかないと思った？ ああいうのって結構こっちも疲れるんだよね。」

だから命令！ 望月鷲君、君は店長と仲良くすること！！ オーケー？」

途端、浅倉さんの言葉に俺の体はビクンと震える。ビリビリと痺れるような感覚に、体は座っていた椅子に吸い込まれていった。どうやら蛇女には感じないようだが、目を丸くしていることから驚いている表情だとわかる。

ひどくこの窮屈な感じは『服従』に近い。どうやら偽名といえど、名前で縛られることで命令できるようだ。

「オー……ケー」

「うん、よろしい。じゃあ、店長。また来ます！」

「あ、あの。陽子ちゃん？ ちょっとま」

蛇女ことエンヴィーの呼び掛けも虚しく、浅倉さんは急ぎ足で扉の向こうに消えていった。

不意に見た彼女の笑顔が、俺には悪魔に見えるのはどういった理ことわりか。

俺は頭を垂れて空になった皿を見た。鏡がここにあったなら、俺

の顔は素晴らしく絶望した顔をしているだろう。

「おい、クソワシ。テメ、今どうなってやがる」

「……ふ、服従？」

「……」

「……安心しろ」

「……」

しばらく睨み合ったあと、ニヤリと蛇女は笑って申し上げた。

「テメーなんて大嫌いだ」

「………そこをなんとか。」

く、屈辱だ。蛇如きに敬語を使わざるおえないだと……！？

あの小娘、恐ろしく強い命令力を持ってやがる。魔術師なら完全服従を強いられていたところだ。

Give me a bleak!

第七話 Give me a break! (後書き)

初めて感想をいただきました。

とっても美味しかったです。

ありがとうございます。

第八話 It's out of the question . (前書き)

8 / 3 更新

第八話 It's out of the question .

「じゃ、次。床掃除な」

「……………」

「返事」

「……はい」

「ああ、それが終わったら窓拭いとけ。あたしゃカウンターで会計してるから」

「……………ういっす」

おのれ！ 偉そうに命令しやがって！！

今に見てる。

後で三枚におろしてバラバラのザラザラのクタクタの蛇柄財布に
してやる。

「（まったく。何で俺がこんなことを……………」

「聞こえてんぞ。グダグダ言っただけでさっさと腕と足動かせ、クソワシ。ほら、仲良くしてやらねーぞ。猛禽野郎」

この野郎……………！！！！

「あーもー、あつたまきた！ お前、今からブチ殺す！！」

「あん？ 正気か、クソワシ」

「上等だ。俺がお前をぶつ殺 い、いでででで！！」

奴に殴りかかろうとした俺の体は、雷に打たれたような頭痛によって床を転がりまわる。

何だ！？

俺の体に何が起こっている！？

「思ったより陽子の命令は強力みてーだな。命令違反によって罰を与えているのかもしれない。おい、クソワシ。ちょっと謝ってみろ」

「はあ？ ふざけんな、誰がお前に謝 いでででで！！ ごめんなさい！ すいません！ もうしません！ 許してください！！」

「よし」

そう蛇女が言つと頭痛は時計の短い針のように止まった。痛みをあまり感じない悪魔が痛がる訳だからこの俺の痛みは人間でいうシヨック死ほどの威力ではなからうか。

「どうなってやがる。何で契約もしてないのにここまで命令できんだ！ しかも真名じゃなくて偽名だぞ？ 何千年も生きてきてこんなことは初めてだ！！」

「あたしが知るか、クソワシ。てゆーか、本当に契約してねーのか？」

「……それは確かだ」

「仮契約も……か？」

「ああ、してね え？ してねー よな？ いや、だってアレは あれ？」

「あたしが知るわけねーだろ。どうなんだよ、心当たりあんのか？」

「ここに来るまでの会話を思い出す。」

俺は誘われたときになんて返事をした？

『一緒に、どうかな？』

『いいんじゃない』

「そんな訳あるかああ！！！」

俺の絶叫に、カウンターで計算していた蛇女は手を止めてさらに声をのせて怒鳴った。

「うっせえぞ、クソワシ！！んな大声出さなくっても聞こえてるっつーの。テーマはニワトリか？ あーん？ コケコケ鳴いてんじやねーぞ、クソニワトリいいい！！！」

そんなことは関係ない。という訳で、こっちも負けてられない。

「うるせえええ！！ こちとら不本意に不条理に契約者つくつちま
つてイカしてんだ！！ そのくらい多目にみやがれ、鏡餅いいい！
！」

「いいわけあるかああ！！ こちとら偽名を知られた上に赤字で、
壊れた備品の足しを買いに出かけるんだ、アホウドリいいい！！
絞め殺すぞ、コノヤロー！！！」

ここにきて叫び疲れた俺達は近くの椅子にどっぷりと沈み込む。

まさかあんないい加減な契約言葉で縛られるとは思わなかったし、
なによりそれに気づかなかった自分の馬鹿さ加減に頭に来る。

もはや鳥あたまと罵られても弁解の余地もない。いや、言い返す
けど。

「……古よりの契約呪文は現代には必要ないってか」

「馬鹿。契約呪文つっても、あんなのは飾りみたいなもんなんだよ。
本当に必要なのは契約者の強い力と、悪魔の名前だけ。そのほかは
補助に過ぎねー」

俺のつぶやきに蛇女は解答する。

これはもう浅倉さんが狙ってやったのなら彼女は策士と呼ばざる
おえない。命令力の強さから言って、彼女のポテンシャルはとんで
もないだろう。いや、既に魔術師や魔法使いとして生きている可能
性もないわけじゃない。

だとしたら、俺は『大マヌケの鳥あたま』という呼び名を付けられるかもしれない。

「それで、これからどうする？　大マヌケの鳥あたま」

訂正。既につけていた。クツクツと笑いながらペンを走らせる手が以上に速く、どう見ても俺を憤死させたいらしい。

とはいえ、奴の言っていることはもつともだ。これから俺は浅倉さんを殺して自由になるか、このまま服従するかしかない。

悪魔というものは死というものが希薄だ。滅多なことでは死なない。

ほかの悪魔に食べられることや陰険な魔術師に弄り回されて殺されるか、対悪魔用の武器で抹殺されること……それから、天敵ぐらいいだ。

ほかの悪魔に食べられるということは自身の力不足で終わりだが、ほか二つはこちらにとって恥辱でしかない。人間風情に殺されるのは温厚なあくまであっても松代まで呪ってやるほど屈辱である。

加えて、天敵はもう考えるだけで我慢ならん。

過去三度の戦いにおいて、奴らの性格の悪さは悪魔を名乗っても申し分ないくらいにサドステイックだったし、今尚俺たちに影響を及ぼしているのだから、俺達からしたらあの見かけや行いはもう虚像としか思えない。

I
t
,
s
o
u
t
o
f
t
h
e
q
u
e
s
t
i
o
n
.

第八話 It's out of the question . (後書き)

お気に入り登録、ありがとうございます。

評価などもつけていただけで光栄です。

また感想や、砲丸投げや、槍投げをいただけたら嬉しいです。

第九話 What did you eat? (前書き)

8 / 4 更新

第九話 What did you eat?

「おい、出かけるぞ」

「……どこにだ」

俺が言い返すやいなや、蛇女は呆れたように言った。

「グラスを買いに行くに決まってるじゃねーか……。言っておくが、破損したグラスは十個。ここでは一つ四百円のグラスを使ってたんだ」

「だからなん」

「あたしも悪いとは言え、テメーにも代金を払ってもらっぞ」

何故だ。

「人間に認識阻害の術をかけて、金をぼったくってるお前がそれを言うのか？」

「ああ、安心しろ。面白いことに陽子には一ミクロンもかかっていないからな。ほかの客に限っては面白いように金を巻き上げることができんだがな。まあ、それはいい。それを考慮したうえで、未だにこの店は赤字なんだ」

これまた何故だ。

「おい、この店いつからやってんだ？」

「一年前からだ」

「そんだけありゃ、ぼったくった金でなんとかなんだろう？」

「いや、とって変わったのは三日前だ」

なぜだろう。

今、五以下の数字と月つきよりも小さい日にちという単位が聞こえたような気がする。

「……なんだって？」

「なに、研究に行き詰って気まぐれに人間界を歩いてたら旨そうな人間がいてな。で、隙を見て食べようと潜んでいたが」

そこまで言っただ奴は水を一口飲み、述べた。

「『料理』というものに興味が出てな。少し遊ぶことにしたわけだ」

俺は驚き、そして呆れた。

「……な、何千年も生きてきて、なんで今更料理なんかを？」

「知れたこと。誕生してから料理というものを深く研究したことはないからだ。あたしら種族はテーマーらのように人間には興味がねーからな。これは人間の生活様式を詳しく見るチャンスであり、経験は研究の材料だ」

蛇女はフン、と鼻を鳴らし、我が物顔で言い切った。

なんという理由であろうか。

確かに蛇はどちらかというと勉強バカだ。研究を楽しみとして人間を材料とする奴もいるし、自らの研究のため、人間に知識を分けることも少くはない。

一方、俺の種族である鳥は人間をそそのかすことがメインだ。

人間をたぶらかすことは魔界で随一。鳥悪魔の口八丁に騙され命を取られる人間は大勢いる。

嘘を塗りたくって言葉巧みに誘い出し、人間を喰べる。

逆に、それを利用して、恋愛を成就させたり、王族や貴族になるうとする輩もいるが、それはまた別の話である。

つまり、蛇が勉強バカなら鳥は外面バカだ。

外面を良くするための努力は俺たちにとって当然の行いであり、常識なのである。

そういったわけで、鳥の悪魔は言語や対人関係、適応能力などに関する部分を管轄している。

「だからって、何故わざわざ買いに行く。んなもん、錬金術でも魔法でもなんでも使って直しゃいいじゃんか。そしたら買い物の必要もないだろ。」

「アホ」

俺の素晴らしい提案は暴言という即答の却下で終わった。

正直ムカついてしょうがない。

「あたし達にかけられている枷を忘れたのか？」

そう言つて蛇は自分の手首についている腕輪を指差した。

「これがある限り能力の十分の一も出せねーだろーが」

確かに、それはそつだ。俺の腕にもついている金色の腕輪が俺達悪魔にとって恐ろしく邪魔な手錠である。正直邪魔だ。

「今は昔と違つて人間を脅迫して奪うことはそうそうできやしないんだ。素直に金を払うしかねーだろーが。」

「じゃあ、この認識阻害は魔法じゃないのか？」

「これは結界だ。結界は呪いのカテゴリーなんだからそこまで魔力は消費しないし、効果も十分。とはいえこの店には認識阻害以外のいくつもの結界もかかっているからあたしの魔法はそうそう行使できない。『現界した悪魔はその場に適した行動をしなくてはならない』という制約もあるしな」

面倒な制約だ、と蛇は毒づいてため息を漏らした。

俺も準じて息を吐く。

「どっしてこんなこと……」

「？ 何がだ？」

抱える案件が多すぎて、もはや何が悪いのかわからなくなっている。

「制約のことだ。何もここまでする必要はなかったんじゃないのか？」

「そういう話はするな。頭が痛くなる」

言いつつ蛇女は私服姿になる。どうやら出かける準備が整ったようだ。二人してカバンを持ち、外に出る。

奴は淡い紫の髪。黒い薄手のハイネックのノースリーブにカーゴパンツを履き、ブーツである。

その上スタイルが特上とくれば外に出れば大勢の男からナンパされるのは必然であり、そのたびに男共から生気が抜かれていく様を見るのは少し見に耐えない。

それよりも……。

「お前背、デカイな」

What did you eat?

第九話 What did you eat? (後書き)

感想とか、評価とか、悪口とかあったら教えてください。
美味しくいただきます。

第十話 I can't help it! (前書き)

8 / 6 更新

第十話 I c a n ' t h e l p i t !

別に嫉妬してるわけじゃない。

背が高かったって、それが邪魔ネックになることだってあると思うから。

いや、ホント、マジで。

「いいんじゃないの？ テメーは脳みそ小せーんだから、あんまりデッケーカツコするともつと頭悪くなんだろ。」

失礼な野郎だ。

「そんな訳ねーだろ。俺はこの国に住み着いてもう五百年ぐらい経つが、その時に生きてた人間はこれくらいの背丈だったんだよ。お前みたいに一七五センチ超えている奴は女としてどうなんだよ。デカすぎて壁と勘違いしそうだぜ。」

「身長一六八センチが威張んな。人間界のバレーボールや、バスケットボールというスポーツ選手は皆これくらいだと聞いた。スポーツとは何か知らんが、かなり熱狂しているようだな。」

蛇は口元に指を置いて何か思案する表情を浮かべた。

もしかしたら、研究のためとかなんとか言っつてスポーツをしだすのかもしれない。

その時は是非誘ってもらいたいものだ。

やるとなったら、ルールを教えずにありったけの力でケッチョンケッチョンにしてやる。

「スポーツは人間にとってビタミンみたいなもんだ。

試合やってりゃそこにドラマが生まれる。そこに人間は興奮するらしい。確か 『感動』とか言ってたか？」

「カンドウ？ なんだそれは？」

「心動かされることだ。簡単に言うと興味が最長に達して感情が高ぶることだな」

「シアイ……死合か。人間同士の殺し合いなぞ見ても、特に心動かされることはないと思うが？」

屈託の無い顔で疑問の表情と博士君キャラを出すのはどうかと思う。そして、お前が心底人間に興味がないということが非常に読み取れる台詞をどうもありがとう。お前の勘違いはきつと世界を混乱に貶めるであろうよ。

「もういい、お前喋んな。お前が喋ると確実に誤解を招く。」

これだから陰険で人付き合いの悪い蛇は嫌いなんだ。いっつも穴蔵に引っ込みやがって。

協調性にかける動物は、人間性のない悪魔へと変貌してしまうのだ。

あれ？

ということは、こいつ……もしかして。

「……お前、買い物できんのか？」

俺は恐る恐る聞く。したことなくない、とはっきり言われたら俺はきつと全力でツッコんでしまふに違いない。

しかし蛇の答えは俺の予想外のものであった。

「舐んな。それぐらいできる」

「なんだ、それなら安心」

「この『硬貨』とやらを買いたいものと合成するのだろう？ そうしてそのまま持ち帰ればよし。何も難しいことは何もなし」

「出来るか……！」

硬貨をまじまじと見ながらキリキリとした満足そうな顔をするのはやめて欲しい。

やはりこんなやつに買い物などできないのだ。

行けば最後。なんであろうが売り場という売り場を破壊し、この国の政府を潰しにかからない。それは人間を観察、楽しんでる俺にとって『益』の『え』の字もない。ただの迷惑に過ぎない行為である。

「お前、今まで一体どういつ召喚をされてきたって言うんだ！」

「？ 一番新しい召喚の記録は五千年前だと記憶しているが……何か間違っていたのか？」

ダメだ。

こいつはもうダメだ。

生み出されてから数えるほどしか召喚されていない上に人間の生活を全く知らない。

今ならため息で竜巻を出せそうだ。

「あっていたのは『硬貨』を使うところだけだ」

「何？ 他の魔法を使わなくてはならないのか？」

あまり魔力は食いたくないんだが、とぼそぼそ言いながら俯く蛇女。

誰も魔法を使うなんて言っていないし、そもそも人間社会で魔法は必要ない。

「心配ない。必要なのは硬貨だけだ」

もうここまで来たら、こいつが飽きるまで付き合っしかねえ。ここで逃げたら大陸が一つ消滅する。俺は頭に昇った血を下ろし、深呼吸してから告げる。

「働くわ、俺」

「はあ？」

その『何言ってるんだ、こいつ』みたいな目で見るのはやめて欲しい。

「お前があんまりにも人間に関して無知だから、俺もあそこの店で働くことにする。短気なお前のことだ、気が触れることがあれば日本を消し去ることもいとわないだろう。俺は人間が好きだ。彼らを殺戮するのだけは許さない」

俺はこれ以上ないくらいはつきりと本心を告げる。

人間をたぶらかすことは悪いことではあるかもしれないが、生きるために仕方がないことだし、逆に本質的にはからかいたくしてしょうがないくらい人間が好きなのだ。

いやはや、恥ずかしいことではあるけども。

蛇は戸惑ったような……それでいて真剣な顔と声で返してきた。

「て、テメー」

「何だ？」

これが俺の、誰も苦しめない最善な策だと思っつ。

俺はにっこりと、ココロを広くして聞き返す。

「……………あたしがそこまで世間知らず……………だと？」

蛇はふるふると組んだ腕を震わせ、その凶体の割に華奢な肩を揺らして言う。

「

……………?」

「フ。フフフフ。決めたぞ！ テメー、働くといったな。命令を最大限に使ってこき使ってやるから覚悟しろ！！」

俺は、何を間違えたのだろう。

I c a n ' t h e l p i t !

第十一話 Why do you exist in this world?

8 / 7 更新

買い物から帰ると、気になっていることを聞いてみることにした。

「それにしてもお前、どうやって調理したんだよ？ 調理したことなくせに、よく死人を出さなかったな」

一つ、三日前に店主と入れ替わったくせに料理が出来ていたことだ。

あれだけの世間知らずだから間違いなく大量殺戮兵器ゲテモノを作っていたと思っただけだが、そうでもなかった。

むしろ旨いぐらいだ。

「ああ、それは この本を見て作ったただけだ。どうやらこの店のメニューのレシピのようだが、えらく詳しく書かれています。勝手もわからないからその通りに作ったんだ。おかげで客からは不満の一つもなかったぞ」

そう自慢げに言いながら手にある本をペラペラと捲っていく。本の大きさはだいたい英和辞書並みだろうか。昨日買ってきたとも言っぐらいに新品同然の本である。

どうやらその本のおかげで店の中が死体で埋まらなかったようである。

全くもって奇跡の本だ。レシピ

「しかし、この本は相当古いモンだな。一年や十年前の本じゃねーぞ。恐らく作られてから千年は経ってる」

「どうして？ 汚れも傷もない綺麗な本じゃないか」

「いや、魔力封印が施されてる。かなり強力だ」

「ふうん。料理好きの魔術師か魔法使いの仕業か？ そんなもんほつといたところで何も危害はねーだろ。だいたい、魔力封印なら名前が」

「名前はジズ・フライマ……と書かれているが？」

「……………なんだって？」

「聞こえなかったか？ ではもう一度だけ言おう。名前はジズ」

「いや、聞こえてる、聞こえてる。ちよつとその本をよこせ」

俺は本を受け取り中身を確認する。ページのスミからスミへと文字は書きつられ、時には挿絵があったりなかったり。

相手を幻惑にはめる薬や変身薬の作り方、おまけに惚れ薬の調理方法などが書かれている。

「……………どうした、鳥頭。顔が真っ青だぞ？」

おかしい。この本がこの国にあることはありえないはずだが。

「おい、トカゲ。この本と一緒に何かなかったか？」

「何かって……特に何もなかったぞ　鷲の紋章が描かれた指輪以外はな」

クソ、ハプスブルグ家め。お前たちは誰のおかげで繁栄したと思っ
てやがる！！

「何やら文句を言いたげな顔をしているが……これはお前が作った
のか？」

「ああ、そうだ。千年くらい前に召喚されて、ある貴族を王にさせ、
尚且つ繁栄させてやったときに作った」

「成程。貸し一つだな。それが魔術師の手に落ちればお前はタイヘ
ンなことになっていただろうからな」

和かに本を取り上げる蛇。

なんとも痛いところ付いてくる女だ。流石、人間の傷口に回復魔法
と腐食魔法を重ねがける悪魔は違う。

「これはもう言い逃れできねーだろ。いい加減この店を大規模にし
て料理を研究したいんだが。当然、手伝ってくれるんだろ？」

おのれ……一度では飽き足らず二度までも俺に拒否権を与えない
など……！！

「あ、ああ！　もちろん手伝うとも。全世界にチェーン展開をする
ほど大企業にしてやるから覚悟しろよ！」

「ああ、期待している」

俺と蛇はにっこりと頬を上を持ち上げて、しばらくまた視線を交わし合う。

「……………フ、フフフフフ。」

もつとつにでもなれという心底諦めた笑いと、浮気の果てに弱みを握った愛人独特の笑い声が店内を包み込んでいるのが分かった。

それにしても、

「三日前にすり替わったんだろ？ 浅倉には気づかれていないのか？」

俺は話題を変えるべくさらなる疑問を投げかける。二つ目の疑問はこれだ。

どつという理屈が知らないが、浅倉には特殊な能力がある。悪魔の偽名を知り、結界の効力を無視できる能力だ。

後者だけならまだわかる。結界の無効化……つまり暗示が効かないということは魔術師関連だ。魔術師は大昔から存在していたのだから、暗示を回避する魔術があったところで不思議ではないし、何より正当防衛だ。

金をぼったくろうとする目の前の蛇が悪い。

しかし、前者は理解に苦しむ。悪魔の名を知るには相当な手順や

力がいるのだから。

一体何が彼女にあるというのだろう。不思議だ。

「ああ、そういえばそうか。いや、悪いがそれはあたしにもわからない。おそらく、陽子が特別か、浅倉の血に混じりモンがあるはずだ。じゃなきゃ、テメーはともかくあたしの偽名を知り得るはずはない」

これは最もな意見である。さもなきゃ神か天使クラスを降臨しているぐらいしか思いつかない。こうなればうかつに彼女に近づくのはよろしくない。バックに何がついているかがわからない以上、下手に動けばこてんぱんにやられる。

『誰』が『誰』を、とは言わない。ここまでくれば大抵の人は察しが。。

「つくに決まってんじゃない」

「そうそう、察しがつ　あれ？　お前そんな口調だったっけ？」

「いや、あたしは喋ってねー。　テメーが独り言を言ってただけじゃ」

「ないわよ。」

「そうか、ねーのか。」

なぜだろう。

すごく魔界に帰りたくなってきた。

Why do you exist in this world?

第十二話 I · m w o n d e r e d (前書老)

8 / 8 更新

第十二話 I · m w o n d e r e d

現状把握。

自分は今、店内にいる。

店内には俺と女が一人ずつ……いや、訂正しよう。鷲と蛇が一匹ずつ向かい合って居座っている。

そして、なぜだか知らないが、人間の愛と慈しみが人型に具現化したような白い……クレンザーより白い翼を背負った女がそこにいるようである。

出来ることなら奈落の底に突き落とし、灼熱溶岩の中でシンクロナイズドスイミングをさせて、その眩しいくらいに輝いた羽を溶かしてただの人間にしてやりたいくらいだ。

「何よ、二人とも。『出来ることなら奈落の底に突き落とし、灼熱溶岩の中でシンクロナイズドスイミングをさせて、その眩しいくらいに輝いた羽を溶かして、ただの人間にしてやりたいくらいだ』って言いたげな顔してるわよ。」

「おっとイケない、顔に出たか。これからはもっとうまく隠すよ。俺はそう言つとコップの水を飲み干し、立ち上がる。」

「そう、別にいいわ。私も『インコとミミズの汚れを天界の観光スポット、『聖なる滝』で骨まで見えるほど洗って、羽毛ドレスと蛇

皮のブーツでキメて天界中をグルッと一周したいぐらい』なのよ。
はあ。上司から指令が来てなかったら今頃モールドレスとバ
ッグに囲まれてウハウハなひとときを過ごしていたはずなのに……」
両肩を下ろして落ち込んでいる姿の女子高生。身長はだいたい一
六〇センチで、長い髪を後ろに束ねてポニーテールにしている。

これまた見かけはアイドル並み。きつとクラスに二人きりであ
ら男子高校生の心臓と体が面白いくらい反応するであろう爽やかな
ボディを所持している。

「ミミズ と、言ったか使いつパシリ」

蛇は既に臨戦態勢だ。空気中の水分子が減っていくのが嫌でもわ
かる。

呼吸が苦しくなってきた。

「気安く声をかけないで。悪魔風情が」

我慢だ。我慢しろ望月鷲。

これを楽しめればナンパができる。好きなだけナンパができるん
だ。

「なんで私がこんなことを……。他にも暇そうな在天使はいるでし
ょうに」

「はん、日頃の行いが悪いからじゃないのか？ 天使とあろうもの
がただの給料泥棒とは……人間に同情を覚えるね」

「悪いのはあんたたちでしょ？ 私はしっかりと自分の仕事をこなした上で正当な給金を貰って買い物してんの。あんたみたいに人間をそのかして財産を奪うような奴らと一緒にしないで。マジ不愉快だし」

「そいつは失礼。人間はガソリンで給料元だったか」

「まあ……そんなところ」

しれっとした声で少女……に見える何かが言う。

そいつは肩にぶら下げた少し大きめのカバンをトスン、とカウンターに置いて携帯をいじり出す。

今どきの女の子のふりをしているのか、それともこれからのごとに使うのか……一体どちらだろうか。

「それで、あんたたちはここで何をしているの？」

後者の方だった。今どきの調査に必須なのは携帯か。

「見ての通り、店を営んでるに決まってるじゃねーか」

蛇の答えに少女のボタンを押す指が止まり、キョトンとこちらを見て返答する。

「ああ、違う違う、言い訳の方じゃなくて。あんたたち人間界で何の目的があつてこんなことしてるの？ 侵略？ 殺戮？ 洗脳？ 全面戦争？」

「どれも不正解」

俺は即答する。

「違うの？ んー、あと悪魔がやりそうなことかあ………思いつかないなあ」

「だから言ってるんだろ、店をいとな、」

「いや、その言い訳はもういいよ。つまんないし、ありきたりだし、これといって笑えないし。言い訳ぐらいもうちよっとなんて言えよ」

奴は「わかってないなー」とこれみよがしに肘を付いた右手をブラブラさせる。

お分かりだろうか。いくら真実を話そうともこの態度である。

天使の信条『信頼』『尊敬』をことごとく無視した、いつそ清々しい言い分だ。

「悪いが冗談じゃねーんだ、小娘。これはあたしの趣味と研究のためをやってることなんだよ。あんたが口出ししていいもんじゃねーんだ」

「おとといきやがれ！」と蛇はここぞとばかりに目の前の天使に言う。離婚寸前の夫婦の仲立ちに入った第三者を追い出す勢いだ。

そう言うならカウンターより店の奥に引っ込むのはどうかと思う。

一方の天使はというと。

「えー何それ。私、上司になんて報告すればいいわけ？ ありえないくない？」

眉間にしわを寄せながらムつとした表情で蛇を睨む。ここだけの会話を聞いたらケンカし出した女友達っぽい。

「そのままでもいいだろ。どこか不満があんのか？」

「やに決まってんじゃない！ 私今月仕事サボってシヨッピングしてたから残高少ないの！ にもかかわらずそんな報告書書いたら減給と厳罰処分じゃん！」

「これじゃ天界のアイドルユニット『スリーアングロス』の三千周年記念ライブ行けなくなるし！！」

天界というところは非常に騒がしいところである。魔界と違って発展途上じゃないし、このピチピチ弾ける少女らしきものを満足させるエンターテイメントがわんさかある。

どつりで魔界からの上納と人間から受ける信仰を大いにかっさらって、そこからイベントをやっているわけだ。

「ホント、同情するよ……」

I · m · w o n d e r e d

第十三話 Which do you choose? (前書考)

8 / 10 更新

第十三話 Which do you choose?

「えー、そんでどーすんの、何すんの、何してんの、何したいの？」

「いや、だから店をいとな」

「はあー？ 私はさっさと報告書書いてシヨッピング行くんだってば。」

ほら、ウソつくの良くないよ？ 私、天使だよ？ 刃向かうの良くないよ？

天界法にだって『ウソ、ダメ、絶対』って書いてあるよ？ 破ったら重罪だよ？

だから早く言えって！

私、早く帰ってチケットの予約しないといけないんだから早く言おうよー！！」

可愛子ぶって物騒なことを言うのはどうなんだろう。

需要があるのかはなはだ疑問だ。

てゆうか、途中から私情が挟まっている気がするのはどういったことだろう。

「いや、だから店を」

「私、天使。ほら私すっごく可愛い天使ちゃん！

私しっかりあなたの本音を聞いてあげるよ？

だからホント、とっとと、ザックリ、ドッキリ、ゲロっちゃんな

よ。じっくり言い訳聞くよ？

天界ドラマ『花丸ざかりの君たちへ リターンズ』が始まる三分前までなら片耳程度で聞いてあげるから、いい加減話してっば！」

「いや、だからみ」

「あー、イライラする！ だからウソはダメって！ これ何回言えばわかんのか？

これ私だからこの程度で済んでるけど上司の大天使さんだったらこれ完全にプチっちゃってるからね！

プチきて懲罰ものだからね？ わかってんの？ ね、わかってんの！？」

「だああああ！ うるせええー！！ こちとら真面目に答えてんだ、そつちこそいい加減真面目に報告書かけやコラーー！！！」

「書けるかコラー！ 悪魔が普通に喫茶店営むとかどんだけだよ、ありえねーでしょ、つか、喫茶店かよ、注文取れよ、イチゴチョコクリームパフェ持ってこいよ、ちよつと店長出てこいよ！！！」

「あたしだ」

流石天使。どこまでも傲慢で自分勝手な存在だ。

さりげなく注文しているところが、食い意地を張っていることの実確な証拠である。

店長呼び出しの台詞に即答したのは言うまでもなく蛇だった。天使がカウンターに付き始めた辺りからかかわり合いを極力減らすために奥へと避難していたようだが、手に三角形のグラスを持ってや

ってきた。

「イチゴチョコクリームパフェ、お待ちどう」

「もう出てくるのかよ！ うまそうじゃん。食べたいじゃん。てか、食べちゃうじゃん。てか、これマジうまいじゃん！」

「……てか、キャラ壊れてない？」

悪魔だ鬼だと言われても、そういう感情はひと通り分かる分、自分が作ったレシピで作られた料理を食べてもらって嫌な気はしない。

奴は何口かがついたら後、次第にスピードが落ち始めた。何かデザートの中に不純物が入っていたのだろうか。それとも蛇女特製、^{ゲテモノ}大量殺戮兵器だったのかもしれない。

「……ホントに喫茶店……やる……訳？」

少女の口からは、言葉が細切れになって出てくる。意外にも『不味い』とか『死ぬ』とか『いつそ殺せ』とかいう台詞ではないようだ。

「ああ、ホントに」

俺が言う。

「……冗談……じゃなくて？」

「冗談じゃねーよ」

こっちは蛇だ。

「「「……………」」」

目に見えて天使が悩み始めた。奴の困惑の表情は、人間の男子諸君にとって生きるためのエネルギーになるかもしれないほどの威力を伴っている。

とはいえ、さっきまでの激情ぶりを見ていた者は、ほぼ確実に近づくことを恐れることだろう。どうみてもこの少女は猫をかぶっている。

まったくもって詐欺師だ。

こんなのがカノジヨになったら、草食系男子はほぼ確実に振り回されるだろう。

きっと学校でもこうやってクラスの連中に綺麗なところだけをみせているに違いない。特に男子。気を付けた方が良さだろう。

「どうした？ 人の『いつもとは違った性格の一面を垣間見えてしまったあとにどう付き合うか考えてる』みたいな顔してるぞ」

「そ、そんなカンジ……………」

どうやら予想以上にパフェが美味しかったらしく、『喫茶店かつ洋食店をやる』という言い訳を『言い訳』ではないのかもしれない、と思ったようだ。

「一つ聞くけど」

「何だ、パシリ。あたしが作った料理がうますぎて頬が落ちるってか？」

「黙ってる、ミミス。あんたには聞いてないから。インコ、お前たちは人間に危害は加えないのか？」

顔を真っ赤にして、今にも飛びかかろうとする蛇を制して続けさせる。

「……それはわからないな」

「じゃあ、やっぱり」

「だけど、むやみには食べない。これは約束できる。あくまでもこっちは料理の研究と人間観察の材料だから、そうそう手は出さない」

「例外がある……ってこと？ それは」

「俺達は悪魔だ。人間の魂が食べ物。だから……よこせ」

「……は？」

「お前は『食べてもいい人間のリスト』を俺たちに渡す。俺達はお前に店の売上の二割を渡す。悪い条件じゃないはずだ。欲しいだろっ？ 金」

「……………」

.....
└

Which do you choose?

第十四話 What happened to her? (前書)

8 / 1 1 更新

第十四話 What happened to her?

空を見上げる。

人間界のこの季節の空はとても美しいと思う。窓から見える真っ青なキャンバスに白い絵の具がクリームのように盛られている様は食欲をそそられる。

ああ、あの雲はホイップクリームのような。卵は何を使っているのだろうか。あの量なら卵何個分だろう。いや、あれはホイップクリームではなくて雲だったか。

いや、失敗失敗。

ボケたつもりが本気になっていた。

今の時間は、日付が変わって朝食とも昼食ともつかない曖昧な点^{ポイント}だから厳密に言つと授業中。だからと言って集中して聞く価値はないし、意味がない。

というより、たかだか五十年足らずしか生きていないような男の話聞いたところで何も得するようなトピックはないのだ。

だいの大人が小学生に説法を説かれたところでやる気など微塵も起きないと、
いや、人間には年下に怒られて嬉しがる人種もいたか。人間というのはやはり難しいものだ。

それた話を戻そう。そう、あのあとの話だ。

俺の交渉は天使を悩ませるぐらいにまでクオリティが高かったらしく、『少し待て』ということ、天使が報告書を終了させるまで、業務は特別運転で閉店が早まり、終了と同時に通常運転へとシフトすることになった。

講義が終わり、俺はウェイターをするために学校を出る。

で、ここで都合がいいことから浅倉を呼び出すことにした。

彼女にはむやみに近づきたくはないが、店で働く主旨を伝えないことには相手の動きが掴みきれない。

昨日の命令は解除されたが、彼女は未だ謎である。ブラックボックス

「おはよう、望月君。昨日は店長さんと仲良く出来た？」

「ああ、おはよう、浅倉さん。そこそこ仲良く出来たよ」

嘘は言っていない。

一時的とはいえ、しばらくは協力関係になったのだからそこは問題ない　と、思う。多分。恐らく。きっと。

「そうなんだ。それはなにより」

ニコッと自然に笑いかける浅倉。授業が終わったと同時に気配なく俺の後ろに立つとはどういうことなのか……説明を頼みたいくらいである。

「ちょうど良かった。今浅倉さん呼びに行くつもりだったんだ」

「ん？ そうなの？ 何か面白い話？」

キングゴブラとオウギワシのどっちが強いか……とか？ あたし的にはキン」

「そういえば、今日は嫌がらせの電話ないの？」

「え、何で？ 全然。全然ないけど？ むしろ快調？ うん、バリバリ快調かな」

それは本当だろうか。本当には思えない言い草だ。

それとキングゴブラとオウギワシの件だが……オウギワシの方が強いに決まってるじゃないか。キングゴブラなんて空から見たらデツカイ木の枝にしか見えないし、とろいし、気持ち悪いし、ザラザラしてるからね。

「……わかったよ。『触れられたくない』ということがわかったよ」

俺は苦笑いをしながら言い返す。

そんなに目を逸らしながら言われたら、結構気になるんだけどね。

「あ、そうだ浅倉さん」

「？ どしたの？」

「俺、アrikアムでバイトすることになったんだ。だからこれからアrikアムでウェイターやることになってさ」

「あ、そうなんだ。望月君、バイトするんだ。あたしも何かバイトしようかなあ。あれ？今『アリアム』って言った？おかしいなあ？聞き間違えたかな？今『アリアム』でって聞こえたんだけど……？」

首を傾げながら額に川を作って言う浅倉。

一体どうしたというのだろうか。

「いや、それであってるよ、『アリアム』。俺、『アリアム』でバイトすることになったんだ」

「うん、一回も同じこと言わないでいいよ。ちゃんと聞こえてるから。てか……え？『アリアム』？『アリアム』でバイトするの……？」

「う、うん。まあ」

どうでもいいけど、そんなに『アリアム』を連呼しないでいいと思う。

そんなに衝撃的なことなのだろうか。

「じゃあ、望月君はアリアムで働くんだ？」

「そう……なるね。どうしたの？」

浅倉は難しい顔をしている。

例えるならテストだ。

テストを返却された後にジッと自分の答案を見つめて、どこか何かが納得がいかないような……そんな顔。

俺は、彼女のそんな顔を初めて見た。

「もしもし、浅倉さん？」

「あ、呼んだ？ 何？ てか、なんの話してたっけ？」

ベテラン女優もビックリなほど自然と笑顔に切り替えた浅倉。

その表情に、俺の後ろにいる『浅倉見たさで内容のない内容を談笑している数人の男衆』の気配が、俺への『嫉妬』から浅倉への『癒し』に変化する。

その様子が、ひしひしと俺の背中に伝わっていくのがじんわりわかった。

What happened to her?

第十四話 What happened to her? (後書き)

週別ユニークユーザが200人、ということ嬉しく思います。

読んでくださる皆さん、ありがとうございます。

これからも続いてゆくので、評価だったり批評だったり感想だったり言葉責めだったりがあると、とっても喜びます。

第十五話 Can you fly the sky? (前書き)

8 / 14 更新

9 / 3 修正

第十五話 Can you fly the sky?

「 どうして……それを? 」

「 ? 働くって? 」

「 うん、それ 」

学校を出、あの店に向かう途中に彼女は俺に尋ねた。

なんだかその疑問の音が、酷く幼稚な子供が大人に怒られて気落ちしているように聞こえた。

「 ああ、なんていうか……ちゃんとっておかないといけない気がしたからね 」

「 ……どうして? 」

「 どうしてって…… 」

浅倉はどうしたのだろうか。今日の浅倉はいつもの元気が不足しているように思える。

「 そりゃあ浅倉さんと店長との仲が良いから……かな。報告しておいても悪いことはないと思うけど? 」

「 ……そういうモン、かな? 」

「 ? どうして? 」

「だってさ、自分は『自分』だけのモノじゃん？ だから『自分のこと』を相手のことを考えて『自分』を話すなんて……あたし、よくわからない」

「よく わからない？」

彼女は「うん」とだけ頭を揺らして応えた。

よく見ると鞆を持つ手が強まっているのがうかがえる。

「あたし、家にいると一人なんだ。屋敷の中にいるのはあたし専属のメイドだけ。外に出てればまだ良いの。外に入ればあたしは誰かといられるし、話せる。」

でもね、望月君。外に出てても誰もあたし浅倉陽子を見てくれないんだ。だから……だからあたしにはよく

「そう言っただけで彼女は微笑んだ。」

その表情はいつも見る彼女の顔かおではななかかつた。

「なんてね。行く、望月君」

「え？ あ、ああ」

俺が何て言い返そうか言い淀んでいると、彼女はいつもの顔で言い切った。

とんでもなくキレイで、可愛くて、美人な浅倉陽子。

学内での彼女は、人付き合いが良く、後輩や先輩に気に入られているし成績も優秀。どこの研究所に行っても引つ張りだこだ。

運動に関して言うなら文句はない。

バスケだろうが、テニスだろうが、マラソンだろうが、水泳だろうが、彼女はなんだって問題なくこなす。

全くもって、悪魔である俺には考えもつかないことであるが、

彼女は、

彼女は何を思って、日々を生きているのだろうか。

仕事をし出してから……いや、八月に入って何日目かの夜、バイトは卒がなく終わり、何だかんだあって時間は午前零時を回っていた。外に出ると自然なぬるい風がふわりと吹く。

それにしても人間界の夏の夜は暑い。エアコンや扇風機やうちわは手放せないほど暑い。

魔界には夏なんて いや、季節というものの自体がない。それに時間という概念もないから、人間界じんこうでいうのなら未来かもしれないし、過去かもしれない。

でもそんなものはどうでもいい。だって、あっても仕方がないのだから。

悪魔は時間を知ったところで食事を気にすることはない。もっというと、睡眠は体が必要としていない。暑かろうが寒かろうが、それほど気にかける問題じゃない。

だから、あっても意味がない。

人間はこの蒸し暑い原因をなんだと考えているのか聞いてみれば、太陽がどうたらこうたら、宇宙がどうたらこうたら言っただけ。

とても面白い言い分だと思う。

人間は欲しいものはなんでも手に入れてきた。

食事をしたければパンを奪い、土地が欲しければ他国を侵略し、遠くの人と話したくて電話をつくる。e t c…… e t c。

でもそのツケのことは何も考えていない。怒り、恨み、後悔……そういったものは見ないふりをしてきた。それが自分たちに牙を向けているとも知らずに。

地球は限界に近づいている。他でもない人間のエゴで。

別に人間を止める気はサラサラない。滅ぶなら勝手に滅べばいい。逆に滅ぶのを手伝ってやってもいいくらいだ。その時が来るなら。いや、不本意ではあるけども。

つと、柄でもないことをタラタラ話していたようだ。忘れてくれ。そんなに面白い話じゃなかったから、気にしないように。

「ああ、今日もいるのか」

さて、人間界には不良と呼ばれる種族がいる。厳密に言えば『不良』というカテゴリーに分類される人間がいるということなのだが、そんなことはどうでもいい。単に、そういう人間がいるということなのだから。

『あん？ ンだよ、こっち見てんじゃねエーよ』

暗闇の中で目をギラリと光らせ、こちらを睨む青年二人。後ろの荷物からしてあと三人いる。

彼らは世間からドロップアウトした、ある意味通常の人間とは異なった思考や行動を持って生活している。

しかし彼らの本質はそうじゃない。

『なあ、アンタちょっと金貸してくんネエかな、つか、出さなきゃブツ殺すんだけど。って聞いている？』

彼らは攻撃性や即物的な面を大いに持った、『人間の原型』にかなり近いと思う。単純に、『欲しければ奪う』ことをやってのける思考回路だけを持っているのだ。

俺と青年との距離は十メートルない。彼らは俺に走って詰めかけてくる。きつと飛び蹴りを放つつもりだろう。前傾姿勢で今にも跳びそうな格好をしている。

「金……ね。良いよ、君たちにあげよう」

『えっ?』

「だから、金、あげるよって言うてんの。どうしたの、何驚いてんの?」

こちらに走ってくる途中、彼らは足をふんじばって止まった。声色を変えない俺に対して驚いたのか、素直にサイフを渡すという俺の態度に驚いたのかは、よくわからない。

『お、オイ、アンタ……何モンだ?』

青年の一人が言う。

「そんなこと関係ないだろ。ホラ、要らないのか? 金」

『い、要るに決まってるだろ、つか、アンタ馬鹿でしょ、自分からサイフ渡すとか……、マジダセエんですけど』

これも青年の一人。

「? そういうもんなのか。いや、こつこつことはあまり経験がな

いから、対応に困るといつか……なんていうか」

『そうかよ。じゃあ あばよ!!』

そう言っつて不良青年の掛け声の下、後ろに控えていた少年が金属バットを持って襲つてきた。着ている服からして、本当は金になんて困っていないのだろう。

本当に、本当に面白い人間だ。

それにしても、

「あ、一つ聞き忘れた」

『んだよっ、タイミング悪イヤつだな!』

言いつつも、律儀に攻撃を止めるところを見ると、根は真面目な子なのかもしれない。

「ああ、ごめん、ごめん。君たちは飛べるのかな？」

『トべる？ はっ、当たり前っしょ、ウチらガンガン、クスリやつて頭ハイになれんだからよっ!』

とだけ言っつて、鉄パイプをフルスイングする青年一人。

なんだ、やっぱり君たちは、

「空を飛べないのか」

「ハア？ アンタ何？ もしかしていつちゃってん」

「お、おいタケ、どうし」

一人、もう一人が動きを止め、虚ろな瞳でトボトボと近くの廃ビルの中へ入っていく。

暗転。

《グシャア》という音と《ドゴオン》という音がハーモニーを奏でて次々と目の前に落ちてくる。まるで、地上数十メートルをから降りることをトランポリンと勘違いしているようだ。

「さて、サイフは返してもらおう。君たちは本当に飛べたのに。残念だ」

Can you fly the sky?

第十六話 B e c a r e f o r . (前書き)

8 / 17 更新

第十六話 B e c a r e f o r .

「私は別に、殺してもいい人間はそう、たくさんいないと思ってるんですけど？」

「ふうん。でも、仕方ないだろ、『腹が減っては仕事ができん』つてな。それに、そいつらはちゃんと『死んでもいい人間』リストには入ってるだろ」

「それは まあ、そうだけど……。でもいくらなんでも多過ぎ、ちよつとくらい私のこと、考えてくれないわけ？ これでも協力者でしょ？」

その言葉に俺は首をかしげる。

おかしいな。

「……はて、天使に知り合いなんていたか、蛇？」

俺が蛇に尋ねると、奴はコップを真つ白な布巾で丁寧に拭きながら答える。

「いるはずねーだろ。悪魔と天使は対^{ついで}になるもの。そう、仲良しこよしするモンでもねーはずだが？」

「うぐっ……。でも協力者であることは確かでしょ。それでいて私の書く報告書が増えるのはどういう状況なわけ？ 私、いい加減シヨツピングに行きたいんですけど」

行くなら勝手に行けばいいと思う。

あ、金がないんだっけ。綺麗に貧乏な天使さんだ。

時刻は夕方　とはいえ午後七時を回ったところ。客はいないし、浅倉も今日はいない。なんでも家の用事だと言っていた気がするが、家とは仲が良くなかった気がする。

この前の大暴露から数日経ってはいるが、彼女はそれから一度も来ていない。

いや、一度だけ来たか。

「これから来れなくなります」とだけ告げ、カフェオレとチーズケーキを頬張って出ていったのだ。

とまあ、こんな状態で、尚且つ、この自称『協力者』は大抵このくらいの時間にやって来る。それでいて天使に似合わず愚痴をクツキーの食べ滓のようにボロボロ零していく輩なのだから、特に『天使』だからとか、『可愛いから』とかは気にする必要はない。

気にしたって、気にした分だけ痛い目を見るのはこちらなのだ。

「にしてもこの店、ホント寂れてんじゃん。もうちょいガーって飾り付けとかしなくて良いわけ？　若い男とかあんまし来なしそうなんですけど」

「しねーよ。テメーの提案を受けるぐれーならこっちの鳥肉の意見を聞いてたほうがまだマシだ。それに、若い男ぐらいホイホイ来る

から関係ねーな」

「そうだぞ、クレンザー。この店に来る客は『悪い意味』で特別な人間が来んだから関係ないんだ。な、蛇酒」

「「「.....」」」

「く、『クレンザー』って。私のこのメチャ、キレーな翼からつけてるわけ!？」

「『鳥肉』ってお前。いくら調理してるからって俺をそういつ目で.....」

「『蛇酒』、か。酒の扱いが得意なテーマの最も言いそうなこった」

三人が三人 いや、三.....いや、三人でいいや。

三人がそれぞれ自分の印象に対して少し気にした瞬間である。

それはともかく、この店には結界が張られている。

結界といっても単なる暗示なので、効く人、効きにくい人ももちろんいる。

そして、結界の効力は、非常に強い『嫉妬』や『怠惰』に関する罪を持つ人間によく発揮されるのだ。

人間は誰しも罪を背負って生きている。

「暴食」、「色欲」、「強欲」、「憤怒」、「怠惰」、「傲慢」、

「嫉妬」

これらはわかっていながら不可避の罪だ。これを回避出来る人間はもはや人間の枠を飛び越えた、ある種人間から格上げされた聖霊の域に達する。これは、並みのことではない。

そして、ジズ、という悪魔は「怠惰」、「傲慢」、を担当。リヴ
アイアサン、という悪魔は「嫉妬」、「色欲」を担当している。

担当……というのはつまり、なんとというか、うん。食事の好みだ。

担当の魂に有りつけければ美味しい魂を食べれたと思えるし、そうでなければ普通の魂と変わらない。高級料理店で食べたか、ファミレスで食べたかの違いである。

担当以外の魂を食べたからって特別、罰もへったくれもありやしない。

ただただ空腹具合が少しマシになった程度だ。

悪魔は天使と違って信仰によるエネルギー充電システムは持っていないので、こうした原始的な方法で生き延びるしかないのだ。

故に、天使は『人間を捕食する』なんていうことは絶対にならないだ。する必要もない。

こうした違いはそもそも、悪魔と天使の生まれる違いによるものである。

気にしたら本当に負けだ。

「ま、いいじゃないか。おかげで金が貰えるんだから。その程度は気にするなよ。むしろ仕事してない分これで稼いでるんだよ。そう、事務仕事で給料もらってるみたいなモンじゃないか」

「えー。天界の事務仕事ってコピーとか資料作成くらいだから、報告書ってあんまり私たち関係ないんですけどー」

「おいおい、天界の事務仕事は随分人間のOL染みているじゃないか。冷房が効きすぎて夏でもカーディガンとか着けてたりするわけ？」

「えー、どうだろ。あ、でも、私の同期の子がそんなカンジだつてこないだメールしてきてちよお愚痴ってた。あの子冷え性のくせによくそんな仕事選んだよねー」

天使は飲んでいたオレンジジュースをストローでブクブクさせながら言った。

今どき恋のキューピッドを信じている誰かさん。悪いことは言わない。こんな俗物な天使を信じるよりも、もっと即戦力になる紳士で淑女な悪魔に相談しましょう。彼らなら、異性を虜にするなんて朝飯前どころか起床前。

とはいえ、ご利用は計画的に。あなたの命は蠟燭より儂いのですから。

B e c a r e f o r .

第十七話 8月5日(前書き)

8 / 19 更新

9 / 3 修正

第十七話 8月5日

「よう、浅倉。今日も元気か？ よかったら飯、一緒に食べねえ？」

「うん、元気は元気。でもごめん、あたしちょっと用事あるから」

「そうか、用事があるんじゃ仕方ねえ。んじゃ、また」

そう言って、ナンパでもするかのように彼は振舞って、教室を出ていった。

この会話は外の人が聞いたら普通のお喋りだろう。知り合いがあたしに声をかけてきた程度だし、内容も大して深刻なことではないと判断するに違いない。

でもあたしにはわかる。彼はわたしを探っている。彼はあたしに『何か』があると疑い、それを恐れ、極力それに干渉したくはないのだ。

もしかしたらその逆、どういうことか、考えがあってアクションを起こすつもりかもしれない。

ホントのところ、あたしは何もわかってはいないのだから何も言えないところが微妙に悲しい。

「さてと。あんまり寝てないからもう帰っちゃおうかな。次の講義はかなり退屈だし」

教室を出たあたりで欠伸をしながらそんなことを口にした。

わざわざつまらない授業に出るよりは、自分に有効な時間の使い方をしたってバチは当たらないだろう。当たったら原稿用紙五枚以上で反省文を書かせてやる。

何故あたしなのか、と。

そんなことを考えていると最近、ふと気がついた。

喋る相手がいなくなると、自分の思っていることを勝手に吐露してしまうようだ。

理由はよくわからない。

自分に言い聞かせるためか、それとも誰かに聞いて欲しくて心中を吐露してしまうのかはきつとあたしには一生わからない。

というか、興味もない。

でも、と思う。

でもこうして一人でいることは自分の意思なのだし、他の人に聞いて欲しいわけじゃない。そもそもわたしは人間が嫌いなのだ。それでも自分は人間なので、『人間』を振舞うしかない。

これはもう諦めるしかないことだ。

こうした中、『人間』は動物や哺乳類なんて呼ばれている。

が、持論として、実際は地球にはびこったバイキンだ。雑菌だ。

ウイルスだ。決して地球上で最も偉く、最も尊いモノなんかではない。

「いつそのこと、ノアの大洪水の時に全て無くなっちゃえば良かったのに」

そうすればこうして、面倒な日々を送らなくても済んだだろうに。

神様がいるとすれば、そいつはとても意地の悪いジジイかババアに違いない。でなければ人間というものを作る必要はなかったはずだ。

人間は愚かだ。過ちを繰り返す。

たとえば朝。今日こそはと目覚ましをかけるのに、執事に起こされること、とか。

たとえば昼。今日はどこで食べようとか考えながら、自宅で食べること、とか。

それはもう、数え切れないほど繰り返している。

「うーん、こういう時なんて言うのが正しいのかな？」

自分でもアホらしいと思う台詞を吐きながら考えてみても、頭には出てこなかったので忘れることにした。

さて、あたしの家は大学から徒歩二十分の場所にある。

バスで行くにしては面倒だし、自転車に乗るには少し綺麗ではないと思う。

自分はスカートが苦手なので、そういった類を外では着ない訳ではあるが、それにしたって短パンで自転車っていう女子を普通の人が見てどう思うのか。

……うん。あんまり良くないと思うのでやっぱり徒歩で通うのだ。

「はあ、眠たい……」

欠伸をもう一つ追加して自宅の門をくぐる。

一般家庭からしたら、あたしの家は大きい。

それはまあ、数百年も前からある家なので仕方ないのかもしれない。名家なら門ぐらいあっても不思議ではない、という認識もあるだろう。

そういうわけで、西洋風の家にちょっとした門が付いていても近所でも言われないのだ。

近所　　といつても一番近い近所は徒歩十五分なので、こちらにあまり来ないだけかもしれないが。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

門をくぐると大きな扉を執事が開け、お辞儀をし、あたしの鞆を手取る。

「ただいま、執事。これから寝るから零時には起こして」

「かしこまりました。それとお嬢様……」

あたしは首を少しかしげ、男を見る。

歳は知らない。そういうのに興味はないので聞いていない。

いや、聞いたかもしれないが、そんな記憶は遠く昔に廃棄処分をしたため復元不可。

身長は高い。大柄ではということでもないがヒョロヒョロというわけでもない、家の執事兼、あたしのボディガードらしい。

らしい　　というのはあたしが嫌がつて一緒に歩かないからである。

当たり前だ。

この執事とは両手じゃ足りないほどの年月ここにいるが、何が楽しくてこんなつまらない執事と四六時中一緒にいなければならぬ

のか……嫌に決まっている。

「私の名は執事ではありません」

じつと、あたしの目を見、無表情のまま執事が言う。

街でスカウトでもされそうな面をしてる割に、そんなだから出会いがないのだ。

「そ。じゃ、おやすみ」

「。はい、おやすみなさいませ、お嬢様。良い夢を……」

会話はそれだけにして自室に向かう。

既にメイドがあたしが何をするか見透かしているように部屋の中で行動している。

ここまでされたら、あたしがしなければいけないことは、メイドによって着付けられた寝巻き……具体的に言うとなグリジエに包まれながらベッドに潜入り込むことぐらいだ。

そうしてあたしは、天井に飾った天蓋を見ながら零時まで眠ることにした。

8月5日

第十七話 8月5日(後書き)

9 / 3 サブタイを変えました。申し訳ありません。

第十八話 8月5日 28時(前書き)

8 / 2 1 更新

9 / 3 修正

9 / 6 修正

第十八話 8月5日 28時

「お嬢様、お時間になりました」

ふいに執事の声があたしの頭に響いた。

執事が来て、こう言うのだからもう零時になったのだろう。

この執事が間違ったことなど言った覚えも、した覚えもあたしにはないのだから、多分そうだ。

「……うん、今起きる……てか、起きた」

律儀にも、あたしのかけた目覚ましを解除して起こすところが少しイラっとするが、そんなものは眠気に負けてどこか暗いところに落ちていった。

「お着替えをここにおいておきますので、私は廊下そとに待機しております」

マーベラス、とだけ告げ、あたしは着替える。

夜の服は言わば勝負服だ。

別にオシャレをするわけじゃなく、ただのスーツだから面白くも何もないけれど。

きちんとYシャツを着、暑くてもスーツを羽織る。

下は……気に入らないけど今日はスカートを持ってこられたので、それになった。鏡を見て、おかしいところがないかチェックしてから外に出る。

「良く、お似合いです」

執事はそう真顔で言って会釈をした。

こっちとしても世辞は嬉しく受け取るが、気持ちは伝わらないのでプラマイゼロだ。

「出かけるから、あとよろしく」

「わかりました。それとお嬢様」

「……？」

あたしは横目で執事を見ながらぶっきらぼうな態度でいる。

「遅くまで出歩かないよう、お願い致します。では、お気を付けて」

そんな執事の台詞にあたしは返答せず、そのまま門を出て、暗闇の路地を歩きだした。

こうしてあたしが夜に出歩くのは別に夜に眠れないから……とい
うことではなく、どうしても落ち着かないからだ。

何日かこうやって歩き回っているのだが、それでも気持ちが抑え
きれない。

胸が、苦しい。

心臓に穴が空いている錯覚に陥る。

自分でも自分を律することができないなんて……少し腹立たしい。

昼間の昂^{たか}り。

夜のざわめき。

あたしの日常の中には、もうあたしのやりたいことがないから夢
中になれるものがない。

あたしには、こうして夏夜なつよの街を闊歩するしかないのだ。

夏の夜はうだるように暑く、息をついてしまうほど綺麗な空を着きている。

ああ、なんて、

暗転。

「……ふうん。今日は『当たり』かもしれないな」

しばらく、いや、どれくらい時間をかけて歩いたかわからないけれど、ふと、動いた影があった。それは妙に大きな音をたて、やがて静かになる。

「追いつけっ……!!」

全速力で道路を走り抜け、現場へ駆けつける。

しかしそれも遅く、残ったのは水たまりだけ。

場所は、今は誰も使っていない廃ビルの下。

コンクリートがボロボロになった、文字通り廃棄されるはずの建物だ。確かここらでは通常の世界に適應できなくなった人間が生活の拠点にしていたと聞く。

俗に言う、不良のたまり場だ。

暗い中でも人工の光で、薄暗く、赤い水たまりの中に潰れた人型が数人……五人見えた。

「……飛び降り、かな」

十秒ほど水たまりを凝視して視線を上はずらす。

「誰？」

果たして、そこには何かがあった。

何者かはわからない。

男であったか、女であったか。

人であったか、天使であったか、悪魔であったか。

でもやっぱりそれは人間ではない。そう言い切れる自信がある。

だって、翼を持った人型それは、決してこの世界の何かモノではないのだから。

あたしは急いで階段を駆け上がり、屋上までノンストップで移動する。息を切らしながら屋上のドアを抜け、広い場所に出る。

辺りを見回すところどころに引き裂かれた肉片が落ちていることがわかった。でも、それがどの何であるかまではよくわからない。

さっき見た翼を持った何かも、完全に姿を消していた。

「誰が……」

このビルは決して低いわけじゃない。階数から数えて六階はある建物だ。

あたしは一階一階、確かめながら下へと降りていく。不良が使っていただろう汚い机や、今にも壊れそうな椅子。ヤニで汚れた灰皿。スプレーで描かれた汚い落書きや文字。

どれをとっても、彼らが生きていた証拠だ。

その事実だけは、誰が、どんなことをしても拭い取ることはできない。

死んでいい人間なんて、本当はいちゃいけないと思う。でも、世界はそうキレイは出来ていないのだから、これは仕方ないことなんだと割り切るしかない。

『人間が死ぬのは、いつも早すぎるか、遅すぎるかのどちらかである。しかし、一生はちゃんとケリがついて、そこにある。』

誰かが言った言葉だ。

世界というものは本当にこう、生きにくい場所だと痛感する。

「……………今、何時だっけ？」

携帯の時計を見るともう四時を回っていた。いくら昼寝をしたとはいえ、眠いものは眠い。このまま捜し物するのは体によろしくない、ということにする。

「今日はもう、帰って寝よ」

欠伸を一つして、今日はもうおしまい。

おやすみなさい、翼の使徒。

また今度。

8月5日 28時

第十八話 8月5日 28時(後書き)

9 / 3 まさかのサブタイ変え……。

9 / 6 内容が変わりました。

第十九話 8月6日(前書き)

8/24 更新

不定期な更新で申し訳ございません。
話の方向をまとめようとして、てんやわんやし、大変なことになっ
ていました。

それでは十九話です。どうぞ。

第十九話 8月6日

「ねえ聞いた？ 飛び降りの話」

「あー、聞いた！ 何人がオノキ通りで自殺したってやつでしょ？
最近この辺多いよね」

「そうそう。もしかしたら、家に聞き込みとか来るかもよお？」

「えー、その飛び降りって、うちの学校となんか関係あるのー？
夜中にうるついていた不良たちだって噂だよ？ 接点ないじゃん」

とか、なんとか。

大学内ではてんやわんやと学生がざわざわしている。

俺は興味がないからそのことに触れはしませんが、正直同じことを
リピートして聞かされると頭がいなくなるのでやめて欲しい。

「なんだ、ニュースでやってたのか」

携帯のワンセグをつけてみれば早速ニュースを報道していた。

聞けば被害者は五人。わりと有名な不良、という肩書きを持った
少年少女複数が死んだらしい。

死因は転落死なのか、ショック死なのかはわかっていない。死ん
だ後、^{あと}落とされたという線もあるようだ。

……五人？

「ああ、なんだか大出血からのショック死じゃないかって言われてるらしい。屋上に肉片がいくつも落っこちてたみたいだ。そこらに獰猛な犬かワニでもいたのかね？」

「坂城」

「おう、イケメンの坂城さんだよ。ちなみに犬のいた痕跡は少しもないと思うぜ。あの辺は野良犬も出ないからな。まあ、ワニは……普通に考えていないよな」

「いや、犬だ、ワニだったのはお前が言ったことだから。俺、何も言っていないから」

食堂で休んでいた俺に声をかけたのは大柄で背の高い男だ。

俺よりも十センチは高く、筋肉も付いているから頭仕事より体仕事の方が得意に見えるし、本人もそう思っている。本人曰く、勉強することが嫌いで、運動をしている方が好きだと自負している。

もったいないことに、頭はそんなに悪くない。

面構えはイケメンといえば　そう、なのかな？

モデル……というよりは俳優をイメージさせるような雰囲気を持って持っている。実際に演技関連の部活やら何やらをやっているのでその傾向は強い。

「そうだったか、まあ、いいじゃねえか。気にすんなよ」

「ああ、気にしない、気にしない。気にしたって仕方ないからね」

「そう何度も言うな。そういえば、面白い話を聞いたぞ」

なんであろうか。坂城は椅子に前のめりに座って言う。

「その肉片が落ちていた屋上なんだがな、よくわからんが鳥の羽が落ちてたらしい。鳥の種類は不明だが犯人が意図的に残したものが偶然、鳥が舞い降りたか……そんなとこだろ。調査次第ではニユースで報道されるかもしれないな」

「鳥の、羽。それってどんな形だ？」

「知らん。俺はただ聞いたただけだ。噂に過ぎないから、あんまり気にするな」

そう言って坂城は持っていたペットボトルをグイッと飲んだ。

「ふうん。形状は不明、か」

「そうそう、不明不明っと あれ？」

「どうした？」

「いや、あれ」

人先指の向こうには女が一人、食事をとっていた。

「あの女がどうした？」

「好みじゃないが、なんだか気になる」

恋愛でもないのに気になる　とはどういうことだろうか。

「なんつーか、あの女、今にも死にそうな顔してる。こっつ、自殺？
っていうか、そんなことしそうな雰囲気だ」

うちの大学の食堂はビルで言うと十階にあたるような場所に設置
されている。

十階と九階は食事スペースがあり、十階は注文する場所とテーブ
ル。九階はまるまる食事場所だ。

どうしてこんな高いところに食堂をつけたかと調べれば、学長は
高いところが好きである、という事実と結びつき、パンフレットの
写真を見る限り納得せざるおえない。

食事をしている女を見ると、人生に失望したような顔をしながら
パスタを食べていた。

顔の向きは窓ガラスを向き、外を睨むような、羨望のような目付
きでじつと見つめているのがわかる。

確かに、しそうな気配だ。

「お前と知り合いつてことはないか？　声かけてこいよ」

坂城は尋ねる。

どういう意味だろう……ナンパか？

「いや、面識はないね。お前が行ってこい」

「いやあ、このカレーはうまいなあ！」

あ、話題変えた。

よし、お前にはもう何も教えてやらん。テスト範囲、レポートの
期日、その他もろもろ。

「冗談はともかく、本当に飛び降りかねないカンジだぞ、あの女。
大丈夫なのか？」

坂城はカレーライスを頬張りながら言う。

「知るか。人が旅をするのは到着するためじゃない。それは楽しい
からだ」

8月6日

第十九話 8月6日(後書き)

週別ユニークの激減が半端ないですね。

読んでくれている方、ありがとうございます。
読んでくれた方、ありがとうございました。

第二十話 8月13日(前書式)

8 / 30 更新

第二十話 8月13日

しばらくすると、飛び降り事件は頻繁にテレビで報道されるようになった。

俺が初めてニュースを見たのが一週間前。それから今までで、飛び降りの人数は二十人を超えているのだから、驚きを隠しきれない。気になって調べてみると、人間でなくても動物の飛び降りは、ひと月前から多発していたらしい。

しかし、この街の小さな事件。そう大きなメディアではとりだたされなかった。

「動物の転落死、とでも言うのかな」

「どうだか。人間じゃないんだから、そういう名称は付かないんじゃないの？ 野良猫や野良犬、まあ、中には飼い猫や飼い犬もいたみたいだが、そうそう人間と同じ目線で見られることはないと思うぜ」

坂城はポケっと自室の薄型テレビを頬杖をついて見ながら言う。

「で、ここにきて人間の飛び降りが起き、増加中ってところか」

「そうそう。八月に入ってすぐにこれだから、そりゃ学校だって休みになるか」

ケタケタ笑って坂城はうちわを扇ぐ。

休みなのは夏休みだから、その推理は間違ってると思う。

「手掛かりもなし。犯人は一体誰なのか……」

「犯人？ おかしな奴だな。自殺なんだから犯人なんかいるわけないだろ。突き落とされた訳じゃないし。だいたい、突き落とされたのなら警察だって馬鹿じゃないんだからそれくらい伝えるはずだ。それをお前は……」

本当ならそう考えるが、どう考えても人数が多過ぎる。

呼び出して、後ろから突き落とし、証拠をすぐに消しさえば……難しいかもしれないができないことでもないと思う。

それに、気になるのは動物だ。なんで動物をビルから落とす必要がある。いたずらにしては少し度が過ぎているだろう。

人についてもそうだ。

これだけ飛び降りがあれば警戒もするし高いところは避けて通ると思うけどな。

「あれ？ 自殺の時間帯は？」

「時間帯？ さあ、深夜とか、昼過ぎとか、朝方とかいろいろみたいな。場所も高いところから低いところまで沢山。ああ、眠い。昼を食べると昼寝がしたい。俺、寝るけどお前どうする？」

坂城は大きなあくびをしてベッドに倒れ込む。

大きな図体なので座っている俺が反動で少し浮く。

「寝るのか。うん、じゃあ俺は帰るよ」

「そうか、じゃ、おやすみ」

ラフな格好で、坂城はノースリーブにパンツだ。

扇風機とクーラーを付けているというのにそんなに大丈夫なのだろうか。

「うっ……お？」

坂城の家を出てすぐ、不意にチリチリとした痛みが頭にくる。浅倉の命令に似たこの感じ……最近、この頭痛が悩みの種だ。

これが来るたび俺の意識が遠くなり、頭も視界もぼんやりとする。

「またこれか。たちくらみ……じゃないよな？」

痛みの波長は段々と間延びし、後になると、もう意識は消え、次に目覚めると別の場所だ。これが悪魔とは 情けない。

「望月……君？」

「え？」

ふと聞き覚えのある声があったので、視線を地面から持ち上げている。

「ああ、やっぱり望月君だ。どうしたの、こんなところで。てか、体調悪いの？ 顔、青いよ？」

「あ、いや、なんでもない、から。うん、大丈夫だって」

「そう？ 今日暑いっていつから体調管理はしっかりしないとね、聞いた？ 今年の平均気温って去年よりまだ低いんだって。びつくりだよ」

にこやかに注意を促してくれたのは浅倉だった。

いつものようにボーイッシュな雰囲気を纏った彼女は、優しく俺に手をかけてくれる。

「ありがとう。君は優しいんだな」

そう俺が言うと、浅倉はじと、とした目でこちらを見る。

「うん？ 今聞捨てならないことを聞いたぞ。いつものあたしは優しくないのか？ そうなのか？」

「いや、そうじゃないけど、こういう浅倉さんは初めて見たから」

「そうだったけ？ うーん、誰の前でどんなことしてたか、あたし自身あんまり覚えてないんだよね。だからどんなことを誰に話したかも覚えてなくてさ。ごめん、ごめん」

水の入ったペットボトルを両手に挟み、可愛く謝る姿を見ると、なんだか夢を見ているような錯覚に陥る。悪魔は夢なんか見ないの

に、不思議だ。

「で、望月君はこんなところで何をしているのかな？」

腰に手を当て、子供に尋ねるみたいに浅倉は言う。

「ああ、友達の家に行ってたんだ。そいつが昼寝するからって帰ることにしたわけ。浅倉さんは？」

「あたし？ あたしは……えーと、何だっけかな。うーんと……あれ？ 何してたんだっけ？」

「いや、俺は知らないよ。帰る途中だった　とか？」

「ああ、それナイス！　きっとそうだ。じゃあ、望月君、またね」

彼女はそれだけ告げて俺の視界から消えた。

いや、俺の意識が消えたのかもしれない。

8月13日

第二十一話 8月15日(前書き)

8 / 3 1 更新

第二十一話 8月15日

この間、浅倉と会ってから二日。なんだか記憶に誤差がある。

多分、魂を食べていないせいだと思う。でも、この前食べたのは少し前だ。そんなに急ぐほどでもないはずだけど。

では、何だ？

身体が限界なのだろうか。

もうこの身体を作ってから五百年は経っているから かもしれない。 かもしれない。

「身体の修復を」

しようとして無理だと思いついた。

「ああ、クソ、制御装置があったな。これじゃ魔法も何も使えないじゃないか」

腕についている輪っかを見て、悪態を付く。

悪魔が人間に化けるには、人間を取り殺し、制御する方法が一番だ。

悪魔は完全なオリジナルの人間に化けることはできないから、そうして人間に近づいたりする。模倣も良いが、そうやって化けるに

は魔力の消費が激しい。

もとからある器に入るならそこまで苦ではないのだ。

「記憶がないまま……か」

意識が一時間飛んでたり、五時間飛んだり。

もしくは夜だったはずなのに、次に見ると昼になっていたり……その逆もある。微妙に時間が飛んでいるのだ。

「やれやれ、今日はそろそろバイトに行くか」

今の時間は午後四時。この時刻は客入りが多い時間帯だ。

学校から歩いて行くと、途中には大きな公園があり、そこには小さい子供やお母さんたちでいつも賑わっている。

ああ、今日もいるな、なんて思いながら横切る。

が、足が無意識に止まった。

「むう」

と、唸りながら天使が子供たちをじっと見つめている。

年甲斐もなくブランコに乗りながら。俺は歩み寄って声をかける。

「どうした、天使。子育てについて何か行き詰まっているのか？」

「どーして私が子育てに対して悩む必要があんのよ。違う違う。あの子供、そろそろ死ぬから見てたの」

衝撃発言である。

天使が指さす子供……まあ、十才くらいの子供。栗毛の髪に右頬に絆創膏を貼った少年である。その子がもうじき死ぬようだ。

だとしても、短いスカート姿でブランコ乗って、棒付きキャンディを舐めながら真顔で言うのはやめて欲しい。なんだか電波的だ。

「……へえ。近頃流行ってる飛び降りか？」

こんな子供が自殺ってことはないだろう。

あの子が死ぬとしたら、それはやっぱり他殺だと思う。

「飛び降り？ 何それ？」

「は？ いや、最近ニュースでもやってる飛び降りだよ。お前、テレビ見てないのか？」

視線を空へ移し、また少し唸ってから天使は答える。

「んー、知らないなあ。それって悪魔がやってること？」

「知らないね。少なくとも俺はやってないから」

ニュースになるほど大事おおいにする悪魔は居ないと思うが、悪魔にそのかされた人間ではないか……とは考えられる。

そうか、飛び降りではないのか。

「でも、どっちでもいいや。あの子、もうすぐ死んじゃうし」

そう面倒そうに言ってブランコから立ち上がり、伸びをする。

「さて、そろそろお仕事しようかな。んじゃ、また喫茶店で」

「あ、ああ。またな」

天使は死ぬ人間を天界に届ける仕事がある。奴も天使の端くれ。それぐらいのことをするだけの情熱は持っているようである。俺は振り向き、また歩き出す。

茜に染まった空は綺麗で、こうして歩いてるとなんだか、

「なんだか昔のことを思い出すなあ」

「昔のこと？　なんだそれは？」

「うお！　びっくりした！！」

「なんだとはなんだ、クソワシ。一人でポツンと立ってるから声をかけてやったってーのにその言い草はないだろー。友達がいねーからそんなにひねくれたのか？」

そっちこそ、その言い方はないと思う。

「お前に言われたら俺はもう立ち直れないよ」

「はいはい」と蛇は頷いて腕を組む。

「で、何を思い出すって？」

「うん？」

「いや、うん？　じゃねーよ。さっきテメーが言ってただろ、思い出すって」

「ああ、それは」

あれ、何を思い出してたんだけ？　俺は一体何を……。

「痛っ！！」

瞬間、また痛みが襲う。クソ、こんな時にまた意識が切れそうだ。

本当に情けない」「だな。

あれ？

「？」

「ってなんだ？」

『まだ、思い出せないの？』

蛇の姿がブレて「」の姿が見えた気がした。

8
月
1
5
日

第二十一話 8月15日(後書き)

電波かもしれませんね。

第二十二話 7月27日(前書き)

9 / 4 更新
9 / 5 修正

第二十二話 7月27日

今日の日付は7月の27日、金曜日。

天気は夏真っ盛りの快晴 ではなく、どんよりとした陰鬱な雨である。パツパツと窓に雨の雫が当たる音が耳に届く。

こういう時、講義を受けていると蒸し暑くて、怠^{たる}くて仕方がない。

講義の内容も教科書に沿った内容だし、そもそも大学教科書程度のことなど遠の昔に理解しているので、非常にかつたるいことこの上ない。

「 退屈だなあ 」

あたしにとって、こういう夏の雨の日には特別な感想がある。

十才の時だ。

あたしの大事な、大事な友達がこの世から消えてしまった。友達と言っても同じ年だが彼の方があたしよりも早く生まれたため、『兄』と呼称していたのだけだ。

兄が死んだ時の西暦は 2002年。間違いはない。当時十才。もし死んでなどいかなかったら、あたしと同じ20歳で大学生になるはずだった。

まあ、要するに。それだけ長い時間、彼が死んで経ってしまったのだ。

しかし、時計を眺めたってあたし自身がどうなるわけじゃないし、ましてや彼が生き返るかどうかなんてありえることじゃないから、そんなことはどうだっていい。

でも、あたしは忘れたことなんて一度もない。

忘れようがない。

だって、彼はあたしの頭の中にいるのだから。

簡単に言うと、あたしはあたし自身とは別に、他の人格を持った人間なのだ。だから彼がいなくても寂しくなんてない。

いや、これは嘘だ。本当はとっても寂しいし悲しい。

あたしの大好きな兄、望月鷺は悪魔なのだ。

笑っちゃう話でしょ？ 実際、そんなものは嘘っぱちの設定で、ただの彼の勘違いなんだけどね。

彼は小さい頃から悪魔を信じてた。ううん、悪魔だけじゃなくて天使や幽霊なんかもいるって信じてた。サンタクロースもそう。

まあ、子供だしね。あたしも子供だからそういうこともあるって信じてたけど、やっぱり現実にそんなものはあるはずも無く、彼は信じたまま亡くなってしまった。

そのあとあたしはショックで衰弱……そして昏睡へとシフトした。

意識を失っていた中で、真つ暗な空間がずっと続いていた。

もしかしたら、ただ瞼の裏を見ていただけかもしれないけれど、そのときのあたしは夢を見ているものだと思つてたらしい。

こんな真つ暗でつまらないなら、楽しい場所にすればいいってね。

そういふとんでもなくアホらしい単純思考で、あたしは望月君を作った。

そう、あたしは望月鷺を作ったのだ。

基本ベースはあたし。そのときからあたしは成績優秀、運動神経抜群の天才　と呼ばれていたのです、それに基づいて彼の人格を作つていった。

結果、悪魔信仰をしていた望月鷺の人格が出来上がってしまった。

昏睡していた期間はだいたい五ヶ月らしいが、あたしが『浅倉陽子』として目覚めたのが昏睡から二年後である。

創造主を差し置いて『望月鷺』の人格は勝手に一人歩きを始めたのだ。

それからのあたしは必死に彼を止めることでめいっばいだ。

彼はあたしの姿で、大人に対して自分のことを悪魔だと言い、魔法だ何だと呪文を唱えて人にいたずらをするのだから大変。

汚名返上。名誉挽回。天才らしくことごとく解決していく羽目に

なつた。

病院ではPTSDの診断を受けたが、当時のあたしはこれまた必死に彼を庇った。その時のあたしには彼しか家族と呼べる人がいなかったのだ。

授業が終わるとあたしは友人のところへ行く。

「ああ、陽子じゃないか。どした、目が赤いぞ？」

「うん、ちよつと徹夜。ごめん、坂城君。また部屋を借りていい？」

「いいけど。お前はもうちよつと考えろよ」

坂城君は鍵と共に大きなため息をついた。

「え？ 何が？」

「いい加減、男友達の部屋を自分の寢床にするな」

彼、坂城君は小さい頃からの付き合いだ。付き合い　といつても彼氏カノジヨではなく、ただの友達。少し親しすぎる友達。つまりは友達以上恋人未満である。

そして、望月鷲のことを知っている数少ない関係者だ。

「いいじゃん、こんな美人の女友達がいて。そこらの店頭に並んでいるモデル雑誌の表紙と比べたって劣らないような顔立ちとプロポーションを保持している　と自負してるんだけど……どうかな？」

雑誌張りのセクシーなポーズをとると、彼はまたため息をつく。

「はいはい、美人美人」

「なんだって？ その態度は気に食わんな。あたしにはそんな劣情をしないと？」

「……………それより、望月の方ともうすぐ変わるのか？」

坂城君は急に鋭い目付きになり、あたしは少し戸惑って黙る。

「うん。もう坂城君の顔、あんまり見えてないや」

望月君と変わる時。それはあたしの意識が消えるときで、視界がどんどん薄れていく。

いや、滲んでいくっていう方が正しいかもしれない。

とにかくまあ、そんなこんなで現実とお別れ。

そのあとのあたしは夢の中へと降りていく。

夢……を見ていたようだ。夢の内容は思い出せないけど、望月君が出ていた気がする。

「おい、陽子。立ったまま寝るなよ。危ねえぞ？」

「……んー？ んー？」

「もしもし、起きてますか？」

坂城君はあたしの前で手を振ってみせる。

その光景がどんどん現実味を帯びて、自分が目を覚ましたと気づく。

「んー、どこどこ？ 今何日の何時？」

「ここは学校の正門。今？ 今は七月二十八日の一六時丁度。望月と変わってからだいたい四時間ってとこだな」

「何かマズイことは？」

「特になんじやないか。あ、でも、パソコンみたいにフリーズしたりしてたな。何かあったのか？」

「んと、多分夢だよ。二人とも夢を見てたから意識的に体を動かさなかつたんだと思う」

明晰夢によって作られた空間にいと現実と勘違いしそうになる。何がイチゴだ。馬鹿馬鹿しい。

あれ？　じゃあ妙な気配はなんだろう。悪魔？　天使？　そんなのがいるわけないか。

ふと正門の柱の柄を見つめる。

「これ、タングラムっていうんだっけ？」

触れながら坂城君は尋ねる。

「正方形をいくつかに切り分けて作られたパズル……だね。懐かしいなあ」

この学校のいたるところにタングラムで作られた模様が沢山施されている。

門の柱にはその元となる正方形が彫られているのだ。

「懐かしい？」

「うん、小さい頃は滅多に外に出られなかったから。こういう茜空を見ながら、兄と一緒にタングラムのパズルで遊んだんだ。うわー、ホントに懐かしいなあ」

「じゃあ、問題を出し合ったりしたのか？」

「そつだよ。完成図を覚えて、早く完成させたほうが勝ち。兄つて完成図をいつつも忘れちゃうから、あたしが結構勝ってたんだけどね。『まだ思い出せないの』ってあたし、口癖だったんだ」

あたしは何となく、はしゃいだ気分になってしまう。

いわゆる、ノリノリである。

「いろんなことがあったなあ」

言いたくもないのにそう自虐っぽい言葉まで出てしまった。

そつ、

「あのときも」

何かが見える。あれは、『だ

「！誰!?!」

坂城君ではない誰かの声。それがあたしの言葉を重ねた。

「お前は」

「坂城君、知り合い？」

「いや、食堂で見かけた……だけなんだけど」

「そう、彼は私を見ていただけ。別に二人で『ナンパ』をしようとしていたわけじゃない」

クス、と黒い、長い髪を後ろに流した女性は言う。坂城君は「まいった」とうなだれた。

何だ、コイツはあたしの知らない女にちょっかいを出そうとしていたのか。

それは……ムカツクな。

「浅倉さんは気にしなくていい。彼と密接に関わったことはないから」

今度はフッフ、と笑いながら言う。どことなく、いろんな意味で読めない女性だ。

「えっと、それでああなたのお名前は？」

「名前？ それは、必要？」

彼女は首を傾げる。

「この子は何を言っているんだろう。」

「だって、名前がないと呼べないじゃない」

「ヨべない……?」

脇のベンチに座った彼女はキョトンとあたしと坂城君を交互に見る。

「ああ、『呼べない』。私は天野恭子^{あまのきょうし}」

「天野……さん?」

「何?」

「あ、ごめん、なんでもない」

本当に変な子だ。電波だ。不思議ちゃんだ。

身長はあたしより低い。一六〇センチ前半ぐらいだろうか。特徴は黒い長い髪。それと妖艶に微笑む顔。大和撫子、という雰囲気がある。

あんまり関わりたくはないかも。

「行きたいのなら行った方がいい」

「え? それってどういう」

「陽子、もう帰ろう」

「坂城君……」

彼はあたしの目を見て言った。

「アイツはちょっとコワイぜ。さっさと帰ろう」

「う、うん。わかった」

相変わらず天野さんはクスクス笑っている。

おかしいことに、坂城君に腕をひかれながらも、あたしは彼女から目をそらすことはできなかった。

7月27日

第二十三話 8月15日

(前書き)

9 / 7 更新

第二十三話 8月15日

今日も今日とていつも通りの日常だ。

別に怪獣が出てくるわけじゃないし、地球滅亡とかの予定もない。内閣が解散とかはやっていただけ。新しい首相はどうなることやら……。

学校が終わるとやはり徒歩で帰宅をする。寄りたい店はないし、友だちとツルンで遊びに行く気分でもなんでもない。

だいたい友達なんてアイツしかいないんだから、そういうことはあんまりないのだけだ。

「帰るとしますか」

今日は坂城君がゼミなので一緒にはいられない。仕方ないことだけれど少し寂しい気がする。

帰路は茜色で、それがとても綺麗。アスファルトも無機質な色とは違って見えて、なんだか暖かい気分になる。

こういう日はあたしのとっておきの場所に行こう。

自宅へ帰る道から少し外れた山道。そこを十分ほど登ると、ガランとした公園がある。

古ぼけた遊具とそれで遊ぶ数人の子供たち。

その顔がとても無邪気で、素直に可愛いと思える。

「ねえねえ、お姉ちゃんも一緒にあそばない？」

ひとりの少年が訪ねてくる。

「うん、いいよ。何して遊ぼうか？」

「わーい、わーい」と、何人かの子供たちがあたしに寄って遊びをせがむ。

かくれんぼや鬼ごっこ。高い高いや鉄棒遊び…… e t c、 e t c

こうやって小さい頃に遊んだことがないから、今やってとても楽しく感じた。

「あー、もうこんな時間だあ。帰らなくちゃ……」

あたしを誘った子供が一番に言い出すとそのほかの子供も「ボクも」「わたしも」とみんな言い出す。よく聞くとお母さんらしき人の探す声がした。

「こころが潮時だろう。とっくに一八時を過ぎているから。」

「さて、あたしも帰りますか！」

盛大に伸びをしてガクンと体を休める。

うん、今日はぐっすり眠れそうだ。

ガサ

「あれ？」

木陰の方で何か動いた気がする。

「あれは」

あれは人だ。微妙に服らしきものが見えた。

一体こんなところで何をやっているんだろう。

「……くっ！ 待ちなさい！！」

あたしは駆け出す。

運動神経は決して悪いわけじゃない。見失わなければ追いつくはずだ。

しばらく走ると暗い裏通りに来た。

つまりは路地裏だ。

公園から走って工業地帯付近まで来てしまったらしい。

ここらの地理はそこまで詳しくはないけど、何度か坂城君に連れられてきたことがある。

確か、

「オノキ通り」

「!?」

路地の壁を正面にしていたあたしは後ろを振り返る。

そこには何かの液体で黒く汚れた制服を着た……高校生らしき女生徒が立っていた。

手には大きな人形らしきものを持っている。

「あなたは……」

ぺっ、と少女は何かを吐き出し、その何かは壁に当たって地面に落ちる。

「ったく、猫かぶってんじゃねーっつーの」

「え？」

少女はクスクス言いながらこちらに近づいてくる。半透明な白を纏って。

どこまでも白く、透けて見えてしまいそうな白。

それは何だ。

「っ……ばさ？」

「そうですね、翼ですよ、天使様ですよ。ほら、これあげる

ボン、と投げられたもの。それが目の前の地面まで来て光で照らし出される。

「！」

人形だと思っていたのはあたしを誘ってくれた男の子だった。

ただし、四枝や人間のパーツは少なく、ワニにでも食べられたような痕が残っている。

少女をよく見れば、服についていたのは赤黒い血液だとも瞬時にわかってしまう。

「げっぷ。はあく、人間丸ごと食べるのって結構体力いるね。ちょっと休憩しよ」

少女は壁を背にしてペットボトルを取り出す。

「うん？ アンタも飲む？ でもダメ。私は喉乾いてんの。アン

夕は後」

「……………そ、それって？」

「あー？ 血に決まってんじゃない。こつやっつてずっと飲んでると癖になるんだよねえ」

今度は高校生らしくゲラゲラ笑ってみせる。

「う、嘘、そんな…………。」

「何が嘘なもんですか。これは現実。ちよおちよお現実。ちよお現実。アンタが見てるものも、私がいることも、私とその男の子を食べたことも。ゼーんぶ、げんじつ！」

「な、何で…………何でこんなこと…………」

彼女はまたペットボトルに口を付ける。

「ぶは。えつとあー、んで、アンタはこんなとこで何やってんの？ 店は？」

「み、店？」

「？ アンタ何で猫かぶってんの？ 優等生ごっこ？ だとしたらちよおウケるんですけど！」

「どうしよう。訳が分からない。」

「ちょっとアンタ、私を追ってたんでしょ？ しっかりしてよね。」

ここ数日は期待に込めてやったつてのに……証拠全部消しちゃうんだから。あ、全部じゃないか。最初の方はちよつと取りこぼしがあった……ね？　ね？」

「何？」

少女はあたしの顔を覗き込み、すんすん匂いを嗅ぐ。

次第に少女の顔が苦い顔になっていくのがわかる。

「違う。アンタじゃない。私を追ってたのは……そつちか」

「そつち？」と言いつわる前に誰かがあたしを抱き上げる。見慣れた大きい体だ。それと同時に地面は大きな破壊音でエグれる。

「大丈夫ですか、お嬢様」

「執事……！」

「いいえ」

執事は即否定する。

「常常言おうと思つていたのですが……私は執事ではありません。ボディーガードです。」

付き人ですから、と彼はいつものような無表情に平坦な声で言う。

けれど、どこか暖かな気配な気がする。

「ふうん。血族がいたってわけ？ 通りで同じ匂いがすると思った。そっちの子はちょっと違うみたいだけど……アンタは不死じゃん」

「 けつ、ぞく？ ふ、し？ 」

それって一体どういう……。

「お嬢様、奴に耳を貸してはいけません」

帰りましょう、と彼は促す。

「帰すわけないじゃーん！ 一介の人間に私が視えるわけないんだから」

その言葉に反応して、彼はあたしを降ろす。

「始末しないとねッ！！」

「 堕天使がッ！ 」

瞬時に天使と彼の間はゼロになり、腕と足とでお互いを攻撃する。

「堕天使ってひっどーい。そっちなんて大切な人に大切なことずつと隠してきたんでしょお？ それこそ良くないことだと思っけどお」

「 黙れッ！ ！」

高い塀のコンクリートに囲まれたこの場所。路地にしては多少広く感じる。

天使は羽を羽ばたかせ、隼のように彼に向かい、彼はそれを真っ向から受け止め反撃する。その攻撃で血を流した天使の方はこころなしか震えているように思えた。

「くあー、ゾクゾクする！ 人間どころか、不死なんて食べたらどんだけハイになれるか想像できないっ！ の！！ たのしみー！！！！」

「殺人狂め……」

「殺人？ はー、アンタ馬鹿じゃないの？」

そう彼が言うと天使は顔を歪め、動きを止める。

「殺人っ！ のは人が人を殺すことを言うんだよ。だいたい、人間と人間が殺し合ったところでそれは本当に殺人ですかあー？」

「何？」

「殺人っ！ のは人が人間の意思を持って行う行動？ 違うね！ 殺人欲を持っている時点でそいつは人間じゃなくてただの動物だっ！ の！」

動物には生存本能……というものがある。

自身に危機が迫ったとき、生きようとする意識だ。

「じゃ、じゃあ、人が殺人を犯すのは自分を守るためだって言うのッ！ ？」

天使はまたクスクスと笑う。

「ばーか。そもそも前提条件からしてアンタらは間違ってるの」

「前提……条件？」

「『人間』なんて言い方もおこがましい。それこそ『ウイルス』で充分」

息が凍る気がした。

「アンタたちは自分らのことを『人間』と呼称するけど……それは過大評価のし過ぎ。アンタならもう気づいてんでしょ？」

少女があたしをずっと見る。それに耐え切れなくてあたしは視線をそらす。

「それは……」

「あー、ウゼ。猫かぶりのお嬢様だから言いたくないよってか？ 馬鹿馬鹿しいったりやありやしない。天使がウイルスを殺して何が悪い。つーか、動物以下に信仰されている私たちが一番馬鹿つたらないけど」

にやり、と天使の顔が崩れる。

「でもまあ、それだけだよ。私は人間を殺して^{食へて}るわけじゃない。家畜を食べてるもんだって。人間の尊厳……微塵も感じないからね。ほら、さっさと変われっつーの！！」

双方が動きだし、また戦闘が始まる。

「……………何だ、これ」

一撃一撃で壁や地面が破壊され、お互いも傷が深くなっていく。

「……………何なんだ、これ」

8月15日

第二十四話 8月16日(前書き)

9 / 10 更新

第二十四話 8月16日

「……………何なんだ、これ」

ダメだ。考えてもわからない。何なんだこの状況は。

だんだん気が遠くなる気がする。心臓もバクバクして息が荒くな
っていく。

だって、天使とか……………不死とか……………人を食べる　なん、て。

そこであたしは気を失った。

再び目を開けると天井が見えた。

いつものあたしの部屋じゃない。

ここはどこなんだろう。

「あつたま痛……」

右手を額に当ててうなだれる。

「お目覚めですか、お嬢様」

「執事……」

「いえ、執事ではありません。由衣人です」

「ゆい、と？」

「はい。ただの由衣人です」

由衣人……の来ていた服は綺麗にスタボロにされていた。

彼はいつものかしまった姿勢を保ってはいるが、どこか無理をしているように思える。

クールフェイスもなんだか苦しげだ。

「あの……」

く、気まずい。しばらく沈黙が流れる。

「えと、ここ……どこ？」

沈黙を破ったのはあたしだ。見知らぬ天井に見知らぬ家具。

これじゃまるで……、

「カフェです」

「か？」

「喫茶店・カフェ・カフェテリア。屋敷に戻るうとも思ったのですが……結局はここに行き着いてしまいました」

「カフェって……。でもここ、人がいないよ？」

「いえ、人ならいます」

由衣人は指を示し、あたしはその先を見る。カウンターを超えたところ。

そこにいたのは、

「坂城君！？」

あたしの最も親しい友達である坂城君がそこにはいた。

「よう」

「『よう』じゃないよ！ 何でここに坂城君がいるの！」

「何でって……俺ここでバイトしてるし。そもそもお前がこの店を見つけたんだろうが。『働けないあたしの代わりに』とかなんとか言ってるよ」

そうだったのだろうか。記憶にないのであたしに確かめる術はない。

「それと、あんまり騒ぐなってるの」

「どうして？」

その質問に坂城君は『なんでもない』とだけ告げた。

どうしようもない……悔しそうな顔をしている。

あたしは未だに状況を飲み込めていない。

「ねえ、由衣人。さっきの子が言ってた『大切な人に大切なことずつと隠してきた』ってあれは 　あれは何なの？」

一瞬、彼の無表情に亀裂が入った気がした。

「お嬢様、少しお話があります。いくつか私の質問に教えてください」

「由衣人……」

澄んだ瞳がこちらを見る。

「お嬢様は……不思議、奇妙、怪訝、神秘と呼ばれる事象を信じますか？」

「………一体、何の話だろう。」

「えっと、それって今の状況と関係ある………の？」

「はい、とても」

由衣人はどこまでも真剣な目付きをしている。それならば答えざるおえないか。

「まあ、不思議なことは世界にたくさんあるから信じてない訳じゃあないけど　そこまで熱心には思考できない、かな」

由衣人は立つたまま一つ頷く。

「わかりました。ではお嬢様、次の質問です。全てを知りたいですか？」

「　　どういう、こと？」

「本音を言いますと、私はあなたに今までのまま………いつもと変わらぬ日常を過ごしていただきたい。危険にさらしたくない。あなたに傷を負ってほしくないのです。だから　だから私はお嬢様に知って欲しくはありません」

由衣人はそこまで言うつと目を瞑り、再度あたしに問いかける。

「知りたいですか？」

「そこであたしは言葉を出せなくなる。

怖いのだ。

自分が普通……とは少し外れた人間であることは分かっている。
でもそれと本当に人間のそれを外れることは違う。

それが、とても怖い。

「でも、知らなくちゃ……いけない気がする」

由衣人はとても悲しい表情をして綺麗な顔を曇らせる。

坂城君も普段見せないような難しい顔をしてため息をついた。

「こうなった以上、もうどうすることもできないだろ。話してやれ
ば」

坂城君の言葉に由衣人は「仕方ありません」と頷いた。

「何かから話しましょうか」

あたしは答える。

「じゃあ、さっきの天使……からでいい？」

「わかりました。話^{はな}しましょう」

由衣人は教師のように振舞っている。

なんというか、懐かしい気分になる。

「天使……とは、簡単に言うとゾンビです」

「ゾンビい!？」

「はい。お嬢様は天使について何か知っていますか？」

「天使って、その……人間を天国へ運ぶ……とかじゃない？」

これはアニメで見た知識だ。由衣人は首を横に降る。

「天使というのは、死んだ人間が何らかの意志をもって具現化したモノです」

「うげ、それって」

「地縛霊と同じです」、と続ける。

「地縛霊って、何かの意識をもって人間を呪ったり殺したりするんですでしょ？」

また一つ由衣人は頷く。

「地縛霊も同じ成り立ちですが、少し違います。地縛霊は悪意や害意を孕んだ人間が死んでできるモノ。問題の天使はその地縛霊がたくさん集まって交わり、その複合体が人間の死体に入り込み自我を

持ったモノです」

「それで？」

「ですが、そこまでではただのゾンビと何ら変わりはありません」

そうか、あんな可愛い女の子でもゾンビだったのか。

あたしは坂城君が入れたアイスコーヒーを一口飲む。

「そのゾンビは自我を持ち始めると自らの悪事を嘆くようになりま
す」

「どついつ心境の変化してんだかって話だよな」

坂城君は何がおかしいのか笑って言う。あたしもコクコク頭を振
る。

「全くですが、理由はわかりません。結果的にそうなるようなので
す。そうして自然とそのゾンビ……『御使みつかい』は、もう悪事を繰り返
さないために人助けをするようになります。ある種、更生をした
……とでも言いましょうか。とにかくそうやって人間を助け、守護
するのが『天使』ということになります」

「じゃあ、さっきの子もそうやって天使になったんだ」

「おそらくは」

昔はやんちゃをしてたけど、大人になってそういうのから卒業し
たって感じなのかもしれない。地縛霊の頃に人を傷つけてたことを

悔やむところとかは良い奴だと思つ。

一瞬、食いちぎられたあの男の子を思い出す。

「でも何であの子はあんな　あんな酷いことを？」

「言ったように、御使いは己の悪事を悔やみ、その分人間に奉仕しようと考えます。しかしあるとき墮天使……というモノになってしまふ天使もいるのです」

「どうして？」

「それはな、『お節介』つてやつ」

由衣人ではなく坂城君が言う。

「お節介？」

「そう、お節介。人に奉仕するため、もっともっと力をつけようと考え出した天使のこと」

「それが墮天使？」

「うん」と一言。

「天使の力の源は信仰だったり尊敬だったり……まあ、有り体に言えば感謝されることなんだよ。だからそのお節介な天使はたくさん人間を救いたくてもっと力を得ようとする」

「その方法は？」

「天使は見えない『気』を力にしている。じゃあ、その『気』の源はどこにあるのかっつーと」

坂城君は指を射す。

「え、あたし？」

「違う違う。魂だよ」

今度はトントン、と自分の胸を叩いて説明してくれる。

「魂は原動力なんだ。人間にも天使にも……悪魔にも」

「悪魔、にも？」

「それはあとで説明する。そんで魂だけだな、魂つてのは肉体に宿ってるモンだ。でも切り離すことなんてできない。わかるか？」

「肉体を支配するために適用され、理性を付与された、特別な実体

……だから？」

あたしがそう言っていると坂城君は違うと言う。

「元々『息』を意味するプシユケーを知と徳の座だとして、『よく生きる』ことを『プシユケーの氣遣い』として説き、プシユケーの世話をせよ、と説く？」

また首を横に振る。

「アウグステイヌスもソクラテスもプラトンも違う」

「じゃあ、人格と記憶の連続性によって接続された一連の精神状態であり、個性の本質的な構成要素である。したがって、魂と関連付けられた人間の肉体のいかなる部位からも論理的に異なっているばかりでなく、個人の存在そのものである？」

「ふむ。それは近いな。いいか、切り離すことのできない理由は肉体が魂を作るからだ。魂や心ありきじゃない。肉体が全てをお前をつくるんだ」

8月16日

第二十五話 8月16日

(前書き)

9 / 1 1 更新

第二十五話 8月16日

「肉体が？」

「そう。だから魂を手に入れるためには肉体ごと食い尽くすしか方法は無いわけ。全部じゃなくなつていい。指の一本でも微力だが力は手に入るんだがな」

だからさっきの子は人を食べていたのか……………成程。

「でも、あれは度を越している。人間を救うために人間を殺しているのだから本末転倒。しかも思考回路が無茶苦茶で、これじゃあただの獣だ。天使がああなつたら最後、無差別に人を喰い殺す猛獣と変わらない」

それは夕チが悪い。

「墮天使になるとその力は天使の時より数十倍にもふくれあがります」

アイスコーヒーを飲み干すと、今度は由衣人が続ける。

「天使はゾンビですから姿は見えません。しかし墮天使はその強大な力を肉体に留めきれず外に溢れ出し、翼を形成します。墮天使のもつ神秘で強大な力が身体を覆っているのですから、通常の間人は認識することができません」

「ああ、だから視えるわけないって言ってたんだ」

「はい」と肯定。

「まあ、人間でも特殊な力や霊力があれば感知も認識も出来ずし、力の扱いに長け、調節のできる天使もいるので絶対に見えないわけではありません」

「調節のできる天使？」

「調節のできる天使は天使の格上、精霊の類たぐいです」

また変なのが出てきた。

これじゃあ混乱しそうだ。そう言つと坂城君がアイスココアを入れてくれる。

やっぱり考えるときには甘いものが一番だ。

「精霊と言つのは墮天使とは方法が違った天使の進化形態です」

「人間を食べないってこと？」

「精霊とは墮天使が人間を喰つて力を付けたのとは違い、別の天使を自身に吸収することで力を付けていったモノで、一般的には悪魔と呼ばれます」

何故だ。

「ど、どうして？ 悪魔つていつたら人間を苦しめるとかなんたらかいたら言つ存在でしょ！？ ……なのはどうしてッ！」

あたしがまくし立てると由衣人が頭を撫で、落ち着かせてくれる。

「そう、世間一般ではそういう扱いになりますが本来、そういった存在のことを墮天使といい、それに対するのが『悪魔』になります」

「どうして悪魔なんて名前が？」

「それは同族を殺すからです。どんな理由があるにせよ、力を手に入れるため、人間の形をした天使を食べ続けるのですから、そこは墮天使と何ら変わりはありません」

そんなことがあるなんて。

「天使でいたって救える人数には限りがある。人間より少し頑丈だったり身体能力が大きいだけでは救えるはずの人間も救えないことだってある。だから、力を欲して強くなっていくしかなくなってしまっただんだよ……悪魔も、墮天使も」

「本当にお節介だ」と坂城君は呟いた。

人間ではない。されど人間にしか見えない彼らは人間を助けるために人間を食べることを余儀なくされ、そして迫害された。

「でも墮天使だって根本は同じなんですよ？ 人間を救いたっていう意識があるんじゃないの？」

「墮天使に理屈は通用しません。翼はあれど空を飛ぶことはできないのですよ」

「何それ？」

「墮天使は特別です。力を手にした者ほど力に溺れていくもので、墮天使にとつての最優先事項は人間の捕食なのです。もう人間の殺害に快楽を覚えた犬と同じ存在でしょう」

なんだかよくわからないけれどおっかない話だ。

だいたい、あたしに出来ることは何も無い。

「これから体制を立て直して墮天使を殺しに行きます」

「出来るの？」

「難しいでしょうが……必ず」

グ、と由衣人は拳を握り締めてカフェの扉を開ける。

「嬢様と” は逃げる」

” ” ?

音が聞こえない。

「行くぞ！」

「あ、ちょっと！」

由衣人はあたしの声を聞かず、外に飛び出していった。

「坂城君、由衣人はさっきなんて言ったの？」

「そんなことを話している暇はない。ほら走るぞ！」

さすがに体育会系だけあって足が速い。

自分でもついていけないのが不思議なくらいだ。

「まったく、浅倉は相変わらず運動神経がいいな。陸上やってた俺がギリギリだっというのは少し悔しいぜ」

「うん、まあ、自分でもビックリだよ。歩幅が全然違うのにな」

「全く」と二人して頷く。

あとどれくらい走るつもりなんだろう。

「もう少し、あと少しだから我慢してくれ」

息を切らしながら走る走る。

なんだか逃げているのに、まるで追っているような感覚に陥った。

8月16日

第二十五話 8月16日

(後書き)

作者、夏祭那奈緒です。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

報告ですが、この”夏色カフェテリア”はあと数話……と具体的に
言いませんが、もう少して終わります。

「つまんねー話だなあ、おい！」とか、

「全然意味わかんないですけど……作者馬鹿？」とか、

「どんだけイミフな展開だよ、クソツタレ」とかとか。

いろいろ感想はあると思いますが、もう少しだけお付き合いください
ませ。

それでは二十五話でした。

第二十六話 7月27日のこと(前書き)

9 / 17 更新

第二十六話 7月27日のこと

「鷺、久しぶり」

「？ なんだ陽海はるみじゃないか。オレは……えーっと、何してんだ？」

「今は陽ちゃんから鷺に変わったところ……ってそんなことはわか
ってるか」

鷺は退屈そうな表情でコクリと頭を垂らす。

眠いのだろうか？

「大丈夫？ 寝不足？」

「みたいだ。陽子のやつ、また徹夜でオレの体を使いやがったな」

「あはは、だねー。相変わらずあたしのことが男にしか見えてない
みたいだし……微妙に会話も噛み合わないし」

そう、浅倉陽子はこの世にいない。

彼女は望月鷺の別人格で、ある意味コイツの妄想だ。

おかげであたしは幼馴染として、浅倉陽子の見張りをしなければ
いけなくなってしまった。

まあ、別に嫌いなわけじゃないから良いけど……。

「あんまり実害はないけど、やっぱり気分がいいもんじゃないなあ」
「それは……悪いと思ってる。正直、こうやってまともに陽海と話せなくなっていくのは寂しいし」

と鷺は申し訳なさそうに吐露する。

自分が自分でなくなっていく感覚というのがあたしにはわからないけど……それはとても悲しいことだと思う。

こうやって鷺と話をできたのは七月に入ってまだ二回目。一回目は週の初めで、二回目が今だ。

「ねえ、鷺、自分を悪魔だと信じている時って、あたしのは男にしか見えてないんだよね、陽ちゃんみたいに」

「ああ、みたいだな。現実世界でどう言葉が調節されてるかわからないがそうなるって。『お前』とか言ってると思うけど」

「こっちではちゃんと『陽海』ってなってるし、一応会話ができる程度に普通かな。あ、でも……」

「何だ？」

「女の子ばかり見てる。鷺じゃないけど、さっき陽ちゃんの時に『雑誌に出るくらい美少年だと思うんだけど』とかなんとか言ってる周りの女の子を誘惑してた」

鷺は見た目がすごくいい。大学の中でも上位の方だ。

陽ちゃんの時には結構ナルシストになるので女の子ファンから黄色い声とラブレターを一気に受けることになる。

でもそうというのはあたしが根こそぎ処分している……………これは秘密なんだけど。

「気色悪い趣味を持つオレになりそうだな」

「そうだよお。見張るのも楽じゃないね」

「悪いな…………と、そうだ」

「どしたの？」

「今日もバイトはあるのか？」

「うん、あるけど…………その時まで驚のままにいられる？」

驚が出ていられる時間は圧倒的に他よりも少ない。

たいていは陽ちゃんが出ているし、望月驚が出ることもある。

驚が出れるのはかなり偶然に近いのだ。

「わからん。でももうすぐ限界みたいだ。次に出るのは 望月驚か」

悪魔の方が。

「記憶を捏造しよう。そうすれば割り込んで俺が陽子が出てくる」

「そんなに上手くいく？ 昔からこういう体質なのに」

「やるしかないだろ。陽子になったらまた記憶を捏造して俺が割り込む。なにかキーワードがあればいいな」

キーワード？

「矛盾が起こりそうな……なんていうか俺が認識できて、陽子に認識できないようなことがいい。クソ、時間がない。意識が、消え……る」

「驚？ 驚！」

キーワードをあたしに任せるってどんだけ無責任！

次に出てきたら一発殴ってやる。あたしに頭を使わせるようなことはするなとあれほど言ったのに……！

「おい、もしもーし？」

「……………陽海、か。ここはどこだ？」

「ここ？ 学校だけど」

「傲慢に溢れた人間の学び舎……か」

ハア？ 何を言っているんだコイツは。

「悪魔思考ダダ漏れですけど？ 人間界に溶け込まなくちゃいけないんじゃないの？」

「そうだったな。やれやれ人間は迫っ苦しくていけ好かない。もっと自由に生きたらいいのに」

「『悪魔はルールを守って生きる』とか言ってなかったけ？ 聞き間違いだった？」

「いや、そのとおりだ。いつものように望月鷲を演じないとな」

ああ、めんどくさい設定を鷲は作ったもんだ。

こっちの身にもなって欲しい。

「それで、陽海さん。俺はこれから何をするんだっけ？ 陽海さんの家の鍵があるからそっちに行くと思うんだけど」

「そうそう。それだよ、望月君。アンタはこれからあたしの家で昼寝することになってんの。はい、行ってらっしゃい」

そうしてあたしは鷲の姿をした別人を送り出した。

一時間くらいするとまた驚の姿が見える。

今は誰だろう……陽ちゃんか？

「よ！ ゆっくり眠れたかい？」

とりあえずはこのノリで言う。

あたしは女優。

誰であろうと演じきってみせようではないか！！

「ん？ ああ、陽海君。なんか外でばけーっとしてたらいつの間にかこんな時間でね。さっさとレポートまとめちゃわなきゃまた徹夜になっちゃうから」

「そう……だね。が、頑張っていこう！ うん、ファイター！」

「あはは、陽海君はいつも元気だね。やっぱり唯一の友達だ。元気を貰ったお礼に勉強を教えてあげよう。レポートも手伝ってあげるから」

ズキリ。

胸に針が刺さったような気がした。

「……………ありがとう」

「さて、どこから始めようかな……………」

「どしたの？」

「……………」

「あの、鷲？」

「え？ あ、何？ どしたの？」

「いや、それはこっちのセリフだって。何急にフリーズしてんの」

「？ そう？ まあ、いいじゃん」

鷲の姿をした陽ちゃんはニコニコと笑顔を振りまきながらレポートを仕上げていく。

鷲の知識を使っただけあって常人の数倍の速さで一ページページを書き上げる。全く無駄がないことについて、あたしはため息をせざるおえない。

今度は二時間ほど時間を経て放課後になる。

鷲と約束した時間だ。

「おい、鷲。立ったまま寝ないようにねー。危ないぞー」

「……………んー？ んー？」

「もしもし、起きてますかぁ？」

講義室から出ると今回七回目のフリーズ。

意識の回復が追いついていないのかもしれない。

「んー、どこどこ？ 今何日の何時？」

「ここは学校の正門。今？ 今は七月二十八日の一六時丁度。望月と変わってからだいたい四時間つてところかな」

「何かマズイことは？」

「特になんじやないかな」

なるべく刺激を与えない返答をする。

「でも、パソコンみたいにフリーズしたりしてた。何かあったの？」

「んと、多分夢だよ。二人とも夢を見てたから意識的に体を動かせなかったんだと思う」

驚の姿をした陽ちゃんは苦い顔をする。

二人とは陽ちゃんとあの悪魔ヤローのこと、か？

フラフラしているのは記憶を確かめているのか、それとも何か考え事をしているのか。

はたまたこれが驚の言っていた記憶の捏造による割り込みなのだろうか。

しかし、あたしにはそれを知るすべがない。

とても悔しい。

「これ、タングラムって言うんだっけ？」

とにかくキーワードになりそうなことを言うことにしよう。

「正方形をいくつかに切り分けて作られたパズル……だね。懐かしいなあ」

「懐かしい、かな？」

「うん、小さい頃は滅多に外に出られなかったから。こういう茜空を見ながら、妹と一緒にタングラムのパズルで遊んだんだ。うわー、ホントに懐かしいなあ」

「……………じゃあ、問題を出し合ったりしたんだ？」

「そつだよ。完成図を覚えて、早く完成させたほうが勝ち。妹つては完成図をいっつも忘れちゃうから、俺が結構勝ってたんだけどね。『まだ思い出せないの』って俺、口癖だったんだ」

違う。

それで遊んだのはあたしだ。あたしと一緒にタングラムで遊んだのじ。

あたしが病気で外に出られないからって、鷲と一緒に遊んでくれ

たんじゃない！

「いろんなことがあつたなあ」

だんだんと鷺の姿をした陽ちゃんの瞳から光が消えていくのわかり、ぷつんと糸が切れたように体が地面に落ちる。

「鷺！！！」

近寄つて抱き寄せ、呼びかけると目をパチパチとさせてあたしの顔を見る。

「陽海じゃないか。……あれ、ここはどこだ？」

あたしは涙をこらえながら、けれど震えながら言う。

「ここは学校の正門前。今日中に会えたね、鷺」

「ああ、そうか。成功だつたんだな」

「良かった」と鷺を抱えながら胸に思った。

鷺も同じように思っているのか優しい笑顔をこちらに向けてくれる。

しばらくそうしていると鷺はボソボソと何かを言った。

「何？」

「いや、なんでもない」

「いじやん、言ってます」

鷲は口をまじまじと動かしては止め、動かしては止めを繰り返して、
とじとじ言ひ。

「じゃあ……………」

「うん」

「陽海って、胸…………小さいんだな。背は高いけど」

あたしが殴ってしまったことは別におかしなことではないと思う。

ムカついただけで人を殴ったことはこれが初めてだが、気分がよいものだ。

そして知らなかった。

人を一回でも殴ると拳が痛くなるなんて。

痛くて……それでいてあたしを突き動かしてくれる何かに火をつける気がする。

あたしが殴った回数は二回なのだが。

7月27日のこと

第二十六話 7月27日のこと（後書き）

リアルが忙しくなってきた更新が遅れました。

第二十七話 8月6日のこと(前書き)

9 / 18 更新

第二十七話 8月6日のこと

食堂に行くと鷺がケータイをしているの見える。

「何やってんだろ」

頼んだカレーを持って後ろからのぞき込むと、最近のニュースである飛び降りについてのことを調べているようだ。

「なんだか大出血からのショック死じゃないかって言われてるらしいね、それ。屋上に肉片がいくつも落っこちてたらしいよ。そこらに獯猛な犬かワニでもいたのかな？」

あたしがふざけてそう言つと鷺はス、と頭を持ち上げてこちらを見る。

この表情は誰だろう。陽ちゃんか？

「陽海」

「うん、胸のない陽海さんだよ。ちなみに犬のいた形跡はないと思うな。店の近くはゴミ捨て場が遠くあるから動物はもっと離れたところにしかいないんだ」

「ワニは流石にいないよね」と付け足しておく。

「ここらには川もないし、店の付近でそういう動物を飼っている家はなかったはず……」というか、オノキ通りに家という家がないので考えるまでもないか。

「いや、ワニだ犬だって言ったのは陽美の方だから。オレ、何も言
ってないから」

「そうだったけ？ まあ、いいじゃん。気にしない、気にしない」

ニコ、と笑ってみせる。

どうやら本物の鷲のようだ。優しい笑顔が胸にしみる。

「ああ、気にしないよ。気にしたって仕方ないからね」

……………微妙に違和感を感じる。

今は誰かわからないのでちょっとカマをかけてみる。

「そういえば、それについて面白い話を聞いたよ」

鷲の目の前の席に座ってあたしは話す。

「その肉片が落ちていた屋上なんだけどね、よくわからないけど鳥
の羽が落ちてたらしいよ。鳥の種類は不明で、犯人が意図的に残し
たものか、偶然、鳥が舞い降りたんだか……そんなところでしょ。調
査次第ではニュースで報道されるかもしれないね」

全部嘘だ。

鳥の羽なんて事件には一度も出てきていないし、自殺なんだから
犯人なんている訳がない。

「鳥の、羽。それってどんな形だ？」

「知らない。あたしはただ聞いただけで、噂に過ぎないから、あんまり気にしないように」

そう言ってあたしは持っていたペットボトルを飲む。

自分でもわかるぐらい腕が震えているのがわかる。

「ふうん。形状は不明、か」

そう言って鷺はまたケータイを弄り出す。

……………違う。本物の鷺じゃない。

陽ちゃんならもっとふざけたノリだし、悪魔ヤローならもっと演技かかった喋り方をするからあたしにわからないはずがない。

それでいて今の鷺は本物の鷺に近い雰囲気話している。

新しい人格……………なのだろうか。

「そうそう、不明不明と あれ？」

「どうした？」

「いや、あれ」

何か視線を感じると思ったら、絵に書いたような大和撫子がこちらをチラチラ見ている。

「こちら　というよりむしろ、鷲のことが好きで、鷲だけを見て
いるようにしか思えない。」

「あの女がどうした？」

「こっちが気になるんじゃない？」

鷲は難しい顔であたしの顔を凝視する。ほかの女の子の視線が痛い。

「なんていうか、鷲のことが好きで好きで死にそうで、鷲と話ができるなら飛び降りてもいいくらい気になってますって雰囲気」

「こちらを見られるとは思っていなかったのか大和撫子さんは顔を外の方へ向け、興奮を抑えているようだ。」

「^や止めないかな？　鷲はそんなにあの女性をじっくり見る必要はないからそのへんで

あの人の体に穴、空いちやうよ。」

鷲のイケメン視姦はそのぐらいの威力を持っているんだから。」

まあ、鷲が誰を見ようがそれはそれで鷲の勝手である。」

うん、勝手。」

勝手ったら勝手。」

勝手勝手。

勝手……だけど……。

「気になるなら声かけてきたら？」

あたしは少々低い声で言う。

「いや、面識はないね。陽海が行ってこい」

「……ッ！ いやあ、このカレーは美味しいなあ！！」

この鈍感さは昔からの驚である。

小さい頃から女の子に好かれていた驚はことごとくフラグをへし折り、小学生から高校生まで数十人が泣かされた。

あたしは驚の幼馴染で、クラスの女の子の味方として活躍するもその影の頑張りは最終的に無為と散るのだ。

そして同時に、その鈍感さにムカついてしまってカレーをやけ食いする。

だって、そうしないと本気で驚の顔に拳を叩き込みそうになってしまうから。

8月6日のこと

第二十七話 8月6日のこと（後書き）

活動報告でも書きましたが、感想……とはいいません。批評でも叱咤でも構わないので欲しいのです。

少しでも……ちょっとでも……ちよっぴりでも、です。

皆様、御高閲のほどお願い致します。

第二十八話 8月13日のこと(前書き)

9 / 20 更新

第二十八話 8月13日のこと

「動物の転落死、とでも言うのかな」

せつかくの夏休み、バイトもなくあたしの家で二人きりだと思えばこんな話を鷺は切り出した。

仕方なしにあたしは答える。

「どうだろ。人間じゃないんだから、そういう名称は付かないんじゃない？ 野良猫や野良犬、まあ、中には飼い猫や飼い犬もいたみたいだけど」

「そうそう人間と同じ目線で見られることはないと思う」なんて笑いながら言うておく。動物が人間と同じというのなら神様だっていてもおかしくないだろう。

鷺はまた小難しい表情を浮かべて思案にふける。

そういうところ、ばっかみたい。

「で、ここにきて人間の飛び降りが起き、増加中ってところか」

「そうそう。八月に入ってすぐにこれだから、そりゃ夏休みだって早まるよ」

ケタケタ笑ってあたしはうちわを扇ぐ。勉強は嫌いなのでぐうたらな生活はとても楽しい。女としてどうなのかは置いておく。

「手掛かりもなし。犯人は一体誰なのか……」

「犯人？ おかしなこと言わないの。自殺なんだから犯人なんかいるわけないでしょ。突き落とされた訳じゃないし。だいたい、突き落としなら警察だって馬鹿じゃないんだからそれくらい伝えるはず。それを驚は……」

まして、どの驚だかがこの自殺に関わっているならともかく、変な話を膨らましていくのは驚の悪い癖だ。

というか、本物の驚なのか疑わしくなってきた。

「あれ？ 自殺の時間帯は？」

「そんなの知らないよ。まちまちな時間だったってニュースでは言ってたけど」

くう。

二人きりになれると思って昼ご飯をつくりすぎたか。

いっぱい食べたせいで眠たくなってきた。

喋りきる前に欠伸で語尾が消える。

「ねえ、あたしは寝るけど……驚はどうする？ 一緒に寝る？」

ベッドに寝、オチャラケたことを言ってみる。

昼をたくさん食べたのは驚だって同じだ。眠くないはずはないだろう。

まあ、断られるのがオチだと思うけど。

「寝るのか。うん、じゃあ帰るよ」

ほらやっぱり。

「そっか。じゃ、おやすみ」

勝負下着で、尚且つ寒いのを我慢して下着姿のまままで驚の前にいたというのに結構あんまりな結果に終わってしまった。

こっぴなったらふて寝た。

「うお？」

瞼を閉じると同時に声が聞こえる。驚くような声だ。

「どうしたの？」

「……………ああ、陽海。オレ、今まで何してた？」

？ どうしたのだろうか。

「何してたって……………一緒に昼ご飯食べて、自殺がどうたらこっぴたら言っつて、もう帰るとかしてたじゃない。大丈夫？」

驚はグ、と体を伸ばして答えた。

「ここ最近、望月鷲がオレの代わりをやってたんだ」

「それって」

悪魔ヤローのことかな？

「でもそんな感じは……あ、でも」

「そう、違和感はあつたはず。一番近くにいる陽海がそれはわかつただろ」

あたしは頷く。

「悪魔じゃない望月鷲を記憶の捏造で作ったんだ。言ってしまうば望月鷲のリメイクってところか」

「ちよつと違つけど」と鷲は苦笑いをする。

「じゃ、じゃあ、本物の鷲は消え……ちやうの？」

体が震える。

寒いことも手伝つてあたしの体はガクガクと音でも聞こえそうなほど。

「ああ、そつだ。なんていうか……うん。限界っぽい」

「何それ……何なのよそれは……！」

あたしは声を張り上げてしまっ。

こういう時は冷静にしなさいって言われていたのに、それを今は忘れる。

「陽海……こういう時は」

「『冷静にしなさい』でしょ！ わかっている。わかっているよ！…！ わかっている、けど……」

自然と涙は止まらない。

演劇部だからとか、お芝居で慣れてるから、なんてこと……この場じゃ役に立たないと胸の奥底でわかりきっていた。

あたしはしばらくベッドに座りながらしゃくりをあげて涙をこぼす。

すると暖かな感触に包まれた。

「しゅ……っ？」

驚の顔を見ると、彼自身、今にも泣きそつな顔をしていることに気づく。

自分が消えそうだっていうのに、あたしがわめいてるから泣きたくても泣けないのだろう。

「驚、ごめ」

「いい。そのまま泣いてる。泣き止んだら、詳しく話すから」
抱きしめる力がさっきよりも強くなる。

あたしは頷いて、もう数分鷺のぬくもりを肌感じていた。

「酷い顔だな」

あたしが泣き止んだのを確認して、鷺は離れる。

「む。女の子にそういうのはないんじゃない？」

「あはは、嘘嘘。本当に可愛い顔だった」

「……棒読みで言っても嬉しくないもんね」

あたしはツン、と鷲から視線を逸らす……が、本当は舞い上がりたくらいに嬉しい。

でもそれをしてしまうとただの空気読めない『ばか女』だ。それは避けたい。

「えっと、それで……何だっけ？」

とにかく話を進める。

「うん、詳しい話をするつもり。本当はもっと遅くするつもりだったけど、もうそろそろ限界みたいだからここで伝えておこうと思っ
て」

鷲は頬をポリポリかいて言う。

「限界ってどういう意味？」

「限界ってのは人格が複雑化し過ぎてバランスが保てなくなっただけのこと」

よく意味が分からない。

「つまり、望月鷲を基本ベースに他の人格がいるわけだけど……その人格独自の感情や思考能力なんかが出てきてしまっオリジナルて望月鷲が消されそうってこと」

「……………」

「簡単に言うと、バージョンアップ」

「バージョン……アップ？」

「一つ頷く。」

「古いバージョンを新しいバージョンが書き換えると思ってくれていい。他の二つの人格がオレよりも精巧になっていくたび、オレが消されていく。ハードディスクの容量は決まっています、使わないものを消去していくのと同じなんだ」

「消されていくって、何を？」

あたしの言葉に少しためらって、驚は続ける。

「記憶だよ。記憶を消していくんだ」

「き……おく？」

それじゃあ、変わる前後の記憶がないのはそういうこと？

「前後の記憶がないことも、不定期なフリーズもそう。一つ一つ本物の記憶と都合のいい記憶とに差し替えていくんだ。当然、オリジナルの記憶は消える」

「消えちゃうんだ……あたしとの出会いも」

あたしの言葉に驚は頷く。

「オレだって忘れたくないから必死に抵抗してる。でも」

「でも？」

「でももう追いついてないんだ」

「そう、あたしに告げる。」

「なんて、」

「なんて爽やかな笑顔なんだろう。」

自分が消えると知りながら、あたしを残していくと知りながら…
…どうしてそんな表情をしていけるのだろうか。

「それが 限界？」

「また一つ頭が揺れる。」

「それが 詳細？」

「また一つ。」

「それが 真実？」

「また。」

「嘘だ」

「……嘘じゃない」

「夢だ」

「……夢じゃない」

「アハハ」

「……ごんごんも」

沈黙。

なんて、話せばいいのかわからない。

言葉が、頭に思い浮かばない。

単語を、理解できない。

目の前が真っ白で前後不覚に陥る。

「
x ?
」

第二十八話 8月13日のこと（後書き）

感想をいただきました。
感謝いたします。

第二十九話 8月16日について(前書き)

9/21 更新

第二十九話 8月16日について

『……………何、これ。……………何なんだ、これ』

眠っていたオレの意識がそんな声で目覚めた。

今までに体験したことのないことである。

意識がない＝存在していないはずなので自分以外の意識の音が聞こえることはありえないと思っていたからだ。

そろそろ本格的に消されるのかもしれないな。

だって、これは脳のバグだ。こんなことがあっていいはずがない。

コンピューターのユーザーが一人ずつしかアクセスできないことと同じだ。

目の前には何が見える。

「誰もいないじゃないか」

今自分が立っているのは路地裏で、特に綺麗というわけではないが汚いわけでもない空間。

グレースケールだった景色に色が宿っていき、自分の意識が覚醒していく。

「何……してたんだけ？」

記憶の消去に伴って前後の記憶がほとんど思い出せない。

オレの経験した記憶ではないし、そもそも都合よく書き換えられた偽の記憶なので信じるに値しない……というか。

何で、服が汚れてんだ。

何で、地面がへこんでんだ。

何で、驚^わのぬいぐるみが落ちてんだ。

何で、

「こんなに体が痛いんだ」

ふと地面を見ると小さな血だまりができていた。

その血をたどっていけば自分の指、手のひら、腕、足、腹、頭から血液を流しているのが確認できる。

「痛ッ」

足の骨が折れたか、ヒビが入っているような痛みが頭の先まで突き抜けた。

もしかしたら地面のこの小さなクレーターは自分がやったのかも
しれない。

だとしたら大馬鹿者だ。コンクリートに肉体でケンカを売るとは
どういうことなのか。

「体が痛い。頭も痛い。これじゃあ動くことすらままならないな」
壁を背にして力なく座る。

「いや、これは『倒れている』っていう方があってるな」

タイヘンなコトだっていうのに、口からは馬鹿みたいに笑い声が
溢れる。

「もう笑うしかやることがないや。陽海には嫌われちゃったし、何
やってんのか自分でもわかんないし。ホント」

そう言ってまたクスリ、と笑う。

「笑うしかないや」

考えることなどもう必要ない。ありえないと思っていたことが起
こった以上、自分に何ができるかは明白だった。

空を見上げれば、茜色を過ぎて、既に暗くなり始めている。

「そつえば、陽海と初めて会ったのはいつだったか」

ふとそんな疑問が頭をよぎった。

陽海とは随分と小さい頃から知り合っていた気がする。あれはい
つだったか。

「ダメだ。全然思い出せない。そもそもオレの名前がなんであるかもあやふやだ。これじゃあもう本当にゲームオーバーだな」

自嘲^{じちぎて}してみると、それもなんだか乾いた雰囲気になった気がする。

胸の穴、心臓に穴が空いている気分だ。

なんていうか、

「こんなとこで何やってんの、一人で」

「そうそう。そんな感……じ？」

地面を見つめていたオレは、近寄ってくる影にすら気付かなかつたようだ。その声に二日ばかりの懐かしさを覚えて、ちよっぴり気分が良くなった。

「よう……とかそのナリで言わないよね？」

「はは、お見通しか。よくわかってんじゃない」

オレがそう言うと、陽海はあからさまに呆れた表情をした。

「なんだその顔は。文句でもあんのか？」

少し好戦的な言葉遣いを試してみる。いつもは冷静キャラなんだから、こつこつのもたまには良いだろう。

しかしその言動にすら呆れた顔をされてしまった。

「あるある。とつてもとつても文句を言いたい気分だよ。さしあたって、鷲のボロボロ加減についてかな。何？ 喧嘩でもしてたわけ？」

「いいトコつくなあ、陽海は。でも正直に答えると覚えてないかな。今しがた起きたばかりでねえ」

「ふうん、それでも減らず口は叩けるってとこ？」

「……どうかな。結構どうでも良いんだ……もうあんまり興味無いし」

オレの言葉に陽海は顔をしかめた。

その顔を見ていられなくて、オレはまた地面に視線を向ける。

「そんなんで良いの？」

「何が？」

「何がって……全部だよッ！！」

全部？

「多重人格の辛さはあたしにはよくわからない。むしろとんでもない迷惑をかけられたって思った」

「はる……み？」

「小さい頃、あたしと鷺と陽ちゃんとで遊んでた。病気で遊ぶこともままならなかった陽ちゃんのために二人で演劇をした。

陽ちゃんの家のメイドさんも、付き人の由衣さんも、みんなあたし達の演技を褒めてくれた。

何より、鷺があたしの演技を褒めてくれた」

そつえばそんなこと。

「ねえ、覚えてる？ エドモン・ロスタンの戯曲」

陽海はオレの隣に座りこみ、自身の膝にオレの頭を乗せる。

「……ごめん」

陽海は「うん」とだけ呟いた。

無表情なその顔は、けれど嬉しそうな表情に感じ取れた。

「シラノ・ド・ベルジュラック」

「シラノ？」

「鷺が教えてくれたんだよ。『皓々《こうこう》たる月の世界へ、機械の助けなんぞ借りないで、ひとつ飛びだ……』あの時の鷺は力ツコ良かったなあ」

そつ陽海は惚ける。

思い出し笑いをしているようなその顔は、どこか恋する乙女だ。

「そんなことを言っていたのか、オレは」

「そうだよ。シラノは唯一驚じゃなくて、あたしが家から持ってきた戯曲。あたしは内容なんてちんぷんかんぷんだったから。驚があらすじなんかをあたしに説明してくれて……それを読んだ驚が一日中、シラノ・ド・ベルジュラックの魅力について語ってたんだ」

「楽しそうに」とニッコリ笑みを浮かべて陽海は言っただけ。

「そういうの、結構恥ずかしいものなんだな。今、オレの顔はとっても熱いよ」

「照れるな照れるな。ほら、『可愛い顔だった』ってば」

オレの髪を撫でる陽海をよそに、自分の顔を陽海の膝に押し付けて冷静さを取り戻す。

小さかった頃のオレは何を考えていたのだろうか。

「で、『じゃあ今度はこの戯曲を演じよう……きつと陽ちゃんを笑わせることができるぞ』って張り切って陽ちゃんの家に行ったの。シラノの鼻は大きくて不細工って設定だったから、驚は付け鼻をして意気込んでたんだよ？」

……………覚えていない。

「それで？」

「それで……あたしたちが着いた頃、陽ちゃんとはもう会えなかった」

「それって……」

「うん、元々病気で体が弱いことはわかってた。でも陽ちゃんも酷いよ、治療しなくちゃいけないのに、無理してあたしたちと遊んでたなんて……一言も言ってくれなかった」

陽海の瞳には涙が滲んでいた。言葉尻もほとんど聞こえないくらいに。

「じゃあ、それから？」

「うん、それから。それから鷺の行動や言動、性格なんかは違和感が出始めたの。普通の人はあんまり気づいてなかったみたいだけど、あたしはすぐに気づいた。鷺の保護者に相談したのもあたし」

「そうだったのか」

オレは何も考えずにそうとだけ呟いた。

自分の記憶は、自分が感じることで確かめることができるのだと思われる。今聞いた話が本当だとしても、オレはそれを真実だと認識できない。

オレ自身、そのような記憶は遠の昔に改ざんされていたようで、自分の記憶だとしっくり受け止めることができないでいた。

悲しいことに。

ただ、他人事のように頭に響いているのだ。

「それが、事の顛末……か」

陽海の頭が揺れる。

「迷惑をかけたんだろつなあ。たくさん」

「それはもういくつもあったよ。男子トイレと女子トイレとか、プールだったり。ああ、温泉もそうだね。子ども会の企画であったんだ、そういうの。でも」

「でも……どうした？」

「本当の鷺が居てくれて嬉しかった」

その表情は今までに見たこともない、とびきりの笑顔だった。

「あたしね、鷺が好きだったんだ。あ、ううん、今の好きなんだけど……それでもあの頃は支えてくれるものが鷺ってだけだったから余計に、かな……って、なに言ってるんだろつね、あたしってば。ごめん、変な話して」

「あ、いや、別に……」

二人して気恥しくなって目と目をそらし、こほん、と前置きしてから陽海は言う。

「とにかく、そういうこと。まあ、あたしが鷺と出会ったのは陽ちやんと会う前なんだけど……それも覚えてないか」

「……………悪い」

自分が情けなくて、まともに陽海の顔を見ることさえできない。

「いいよ、いいよ。驚のことは誰よりもわかっているつもり。悪いところも、良いところもね」

「良いところ？」

「うん、良いところ」

「へえ。どこだよそれ」

「教えたくない」

「なんだよそれ。ケチ」

「ケチで結構」なんて陽海は明るく言った。

なんだかそのやりとりだけで楽しくて、胸の穴が満たされていく
気持ちになれた。

8月16日(土)について

第三十話

幕(前書き)

9 / 24 更新

第三十話 幕

気づけば辺は暗くなっていた。

その暗さはどこことなく、人間が一人もいないのではないかと思わせるほどに不気味である。月の光が天使の羽のよう。

しかしそれでいて、生活音や人の気配は感じる事ができるので奇妙な違和感を感じさせた。この奇妙さはどこかで感じたことがある。

一体どこで？

「ねえ、坂城君。どこまで走るの？ あたし結構疲れて」

最後まで言い切ることはできなかった。

「つつかまっえた！」

「え……」

体の感覚がなくなっていく。

溶けていく。

塵になる。

虚無に墜ちていく。

目の前の坂城君に手を引かれているはずのあたしの手にはその感触がなく、どうしたことか、視界さえもボヤけていた。

「はあ、やっぱり自分の身体は落ち着くなあ。殺すには惜しいよ
その子は、あたしの体を抱きしめ、心底残念な声で言った。

「どう……し、て？」

下を見下ろせば、腕があたしを抱いている。白く、柔らかさそうで華奢な腕だ。

「ゴフッ！」

吐血をした。

が、痛みはなく、まるで夢の中にいるような気持ちだ。

「よ……ちや……ん」

坂城君の声はうまく聞き取れない。その声はどうしてか、悲しく響いた。

身体は立っているのもやっと　　というか、なぜ立っていられるのかも思考できない。

ズン。

途端、その華奢な腕があたしから抜き取られ、鋭い刃物がチラリと見える。

「あなた、だれ？」

振り返りはしない。相手を見据えることもしない。

相手に声は届いたのだろうか。生きているギリギリの息しか口から吐き出せなかった。

抱きしめる力が強くなって、次第に目の前が暗くなってゆく。

「浅倉陽子、これでおしまいだ」

その声は、あたしの記憶の中にある。相手が誰であるかもわかった。

そして、ひとつの疑問。

「どうしてアンタが天使なの？」

答える声はない。

「死んでいたのはそっちはずなのに、あたしが殺されちゃうのか」

「それは勘違いだ。死んでいたのはお前の方。この世界に浅倉陽子は存在しない」

「嘘。死んでいるのは望月鷲。この世界に望月鷲は存在しない」

沈黙は長くなかった。

「それはどちらでもいい。だが、全てなかったことにする。お前の望み通りだ」

望み？

「ノアの方舟……ってこと？」

「そうだ。浅倉陽子も、お前の作り上げた望月鷲も、全部だ。全部消し去る」

全て？

「全て消すっていうならアンタはどうする。アンタも消えるぞ」

あたしが話しているのか、悪魔の方が話しているのか、それはわからない。

彼は「答えるまでもない」と言った。

「自分殺し……自殺か」

「ああ、終わりだ、これで全部。なにかも」

もうあたしに話すだけの力もほとんどない。呼吸をするのに精一杯なのだ。

けれど自然に声が出る。自分の声色こゝろいろではない。

「魔界に戻るのか、俺は。魔界は薄暗くて好きになれないのだが」

「違う、もっと暗い所だ」

「はは、どのくらい暗いんだ？ 闇と同じくらいか？」

「もっとだ。光なんてない……存在すら許されない世界だから」

暫しの沈黙後、悪魔は言う。

「面白い、実に面白い。それも愉快な話だ。いいぞ、空の王、ジズ・フライマはそれに乗ってやる。機械の助けなんぞ借りないでひとつ飛びだ！！」

彼は「ありがとう」と言った。

あたしは、

「嫌だ！ そんな所に行きたくない。行くならアンタたちだけで行け！！！」

渾身の力で振り払い、対峙し、思いっきり振りかぶる。私の拳は彼の顔に命中した。

しかし、

「無駄だ、もうナイフはすぐ傍だからな。心臓が止まるのも時間の問題」

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ 嫌だ！！ 死にたくない、死にたくないよ……。死ぬなんて、耐えられない」

涙が止まらない。どれだけ理由を並べられても、死ぬなんて御免なのに……許されないなんて。

「安心しろ、死ぬのはオレたち全員一緒だ。それに、未練ならオレにだってある」

「え？」

「だがそれも叶えてやる。死ぬのはそれからだ」

「オレの心は束の間もあなたを離れたことがなく、この世はおるか、

あの世までも。

ただひたすらにあなたのことを愛し続け、ただひたすら……」

「十五年、十五年もあたしは幼馴染を演じてきた。

それも今日まで……！」

あたしはあなたを愛しています」

坂城陽海さかぎ はるみは一言に自分の全てをかけた。

彼女はこの状況に涙する。

積みりに積みもった恋や愛をやつと想い人伝えることができるからだ。

そして、最愛の人との今生の別れに。

望月鷺もちづき けいは壁を背にして座り、目をつぶる。

自らの心臓にナイフを突き立て、そして叫ぶ。

「もう行こう、失礼する、そう待たせてはおけない。見てくれ、月の光が迎えに来た！」

坂城陽海の泣く声に彼女を見つめ、髪を撫でる。

「願わくば、冷たい死がこの骨の随まで達した時に、その黒い髪に籠めて戴きたい。二つの喪の心を、浅倉陽子を悼む心に、オレのことも……」

「神にかけて、誓います」

坂城陽海の言葉に、望月鷲は不意に立ち上がって言う。

「助けはいらない、誰も無用！ この壁で十分だ！」

沈黙。

「とうとうやって来たな！ 立ってお迎えしよう！！
見ているな、浅倉の奴……どうだ、これでも喰らえ！ ハッ！
ハッ！」

ナイフは宙を切り、空を切り裂く。

「……和解しよう？ オレが？ 真っ平だ！ 真っ平御免だ！！
最後にオレが倒れるのは承知の上だ。戦う、戦う、戦うぞ！」

ナイフを振り回し、けれど喘ぎながらそれを止める。

「そうだ、アンタはあたしからすべてを奪おうという。さあ、取れ、
取るがいい！
だがな、オレお前がいくら騒いでもオレがあお前の世へ持っていくものが
一つある。

それも今夜だ！！」

彼は息を切らせて続ける。

「皺一つ、染み一つつけないままで。それはな、オレの」

望月鷺は坂城陽海の腕に倒れた。

ナイフの刃を自分に向けて高く掲げ、構える。

坂城陽海はナイフを持った震える彼の手に自分の手のひらを添え

「それは、オレの？」

望月鷺は、坂城陽海の唇に自分の唇を重ねて沈黙。

離れ、互いに目を合わせる。

そしてかすかに笑い、

「心意気だ!!」

望月鷲は、彼の心臓に刃を突き刺した。

幕

第三十一話 そして、大切なこと（前書き）

9 / 24 更新

第三十一話　そして、大切なこと

あたし、坂城陽海には家族がない。

孤児の施設の中にはたくさんの子供がいて、その中であたしは一人きり。

いや、誰も彼もが一人きりだった。

しかし、その施設の中で驚だけは他の子供と違っていた。

驚と会ったのは夏の暑い日だった。

珍しく豪華なアイスコーヒーとサンドイッチをその日に買ったのでよく覚えてる。

大人びた雰囲気や五才とは思えないような知性も持っていたからか、彼からにじみ出るオーラは職員にも感知されていたのだ。

運動も、勉強も、あたしよりもとんでもなく上。

面白さのかけらもない。

けれどただ、鷲を目で追いかけることが楽しかった。

施設の中で二年もすれば小学校に通うようになり、その中では貧富の差によって隔たりが出来、あまり楽しいこともなかった。

学校で遊ぶとクラスメイトにいじめられるので自然と運動神経がよくなった。

鷲はというと、入学してすぐからケンカでは負けなし。とんでもない子供だったのだ。

学校から離れた公園は穴場だ。

そこでよく鷺と遊んだ。タングラムもそう。

いつからか、興味で鷺を追いかけるよりも好きとか……恋とかいわれる感情で彼を追いつけた。

ひっそりと。

胸の中で。

ある日、いつもの公園に行くと、見知らぬ女の子がポツンと立っ

ていた。

聞いてみればこころで有名な家である浅倉の人だった。陽ちゃんは家ででの生活に飽き飽きし、家を抜け出して公園に遊びに来たようだ。

それから三人で遊ぶことがしばしば。かけっこや演劇もこのときからかな。

陽ちゃんは『超能力』とか言っつてモノを動かしたり、透視をしてみせたり、はたまた人を操つてもいた。『暗示』と彼女は言っていたが、凄い能力だった。

あれがマジックか本物かは謎だ。死んでしまった彼女に何も聞け

ない。

同様に、死んでしまった彼とももう話すことはできない。

彼は自殺という方法で人格を殺した。あたしは彼を失いたくなくかつたが、彼を邪魔することなどできやしない。あたしが止めないとわかってるからこそあの方法をとったに違いないのだ。

245

最後に。

あたしはもう独りぼっちになってしまった。

大好きな人たちは皆死に、けれど大切な思い出がある。

「みんな、ここにいたんだよね」

バイトを شدしたのも彼がきっかけだ。彼が全ての原動力だった。

246

カフェテリアの名前は Aliquam Paradise。意味は『私たちの楽園』。悪魔の方はどうやら失楽園と変換したらしい。興味がある人は調べてみるといい。インターネットの翻訳ページで変換の再変換を施行するだけだからね。

さて、彼らが生きていた証を記憶に残し、あたしも生涯を全うし

よ。

さしあたって、今日のバイトからだ。

「こんにちは、エンヴィー店長。今日の仕事は」

そして、大切なこと

第三十一話　そして、大切なこと（後書き）

以上、最終回でした。
夏祭那奈緒です。

読者の方、ありがとうございました。
感想を送ってくれた方も感謝しております。

いろいろハプニングもありましたが、どうやら完走のようです。

アクセスを調べて、人数を確保できなかったのは私の文才や構成力のなさ故でしょう。

そんな私の小説を読んでくださった方、改めて感謝の言葉を述べさせていただきます。

ありがとうございました。

内容的に

「わかりにくい」とか、

「イミフ」とか、

「バルス」とかとか。

そのような場所もあったと思います。

なので、注釈的な話を入れるかもしれません。

一応話は完結ですが、しばらくは連載にさせていただきます。

それでは。

第三十二話 「可能性十二、私（達）はフィクションである」（前書き）

10 / 4 更新

第三十二話 「可能性十二、私（達）はフィクションである」

ここはどこなんだろう。

目を開くと清々しいくらい赤い空が広がっていた。一体あたしは
どうなってしまったんだろう。

「わかってるくせに、浅倉さんはそういうことを言う」

え？

「こんにちは、浅倉さん。調子はどう？」

調子は……痛いところはない。概ね良好おほだと思っ

けど、これはなんなんだ。あたしは殺されたはずで、ここにいる
訳がない。

「じゃあ可能性一、死んでいないのではないか」

そんなのは嘘だ。でなければあのやりとりは何だ。

「可能性二、浅倉さんの夢・幻覚では？」

あんなに鮮明な夢があるもんか。五感全てが揃った本物に近い幻
覚は、現実と捉えるしかない。

「可能性三、浅倉さんはここにはいない」

「ここにはいない……それってどういう意味？」

「浅倉さんは今、私、天野恭子が見ている、感じている存在である」
あたしは天野さんの幻覚？

でもあたしには思考力がある。考えているんだからあたしは生きてるんじゃない、

「天野恭子の作り出した幻覚なら、私の脳を借りて思考しているので、それは理由にはならない」

さつきまでのあたしと望月鷺は？

「可能性四、望月鷺も私が作り出した幻覚。それに伴って個別に、都合のいいようにお互いを書き換えた」

何を書き換えるというのだ。

「お互いの存在。幻覚同士、人格の奪い合い」

人格？ あたしという人格は今ここに？

「あなたは浅倉陽子。では、2002年時に死亡した浅倉陽子は誰なのか」

それは、昔のあたし？

「浅倉さんがそう思うならそうなのでは？ しかし、今の浅倉陽子

はだれ？」

今の浅倉陽子は浅倉陽子だ。あたしはあたしであって、何者でもないのだから。

「浅倉家には先天的な超能力が備わっていた。モノを動かす、透視を行い、他人に暗示をかけることができる一族だった」

超能力？ そんなものがあるはずがない。そんなのはフィクションの中だけだ。

「可能性五、浅倉陽子の暗示によって、望月鷲に浅倉陽子を作り上げさせた」

ありえない。

「ありえないなら、可能性を挙げればいいだけ。それは簡単なこと」

だって、可能性を列挙するだけであたしを定義できるなんて、信じられない。

「可能性六、浅倉陽子は2002年から死んでいない」

.....。

「望月鷲が死に、自分に暗示をかけて、浅倉陽子は望月鷲を作り上げた。強力な暗示によって支配されていたため、本物としか思えない夢・幻覚を見ていた」

.....。

「可能性七、皆バラバラに生活していて、飛び降りの日に異変が起きた」

そんなことは……ない。その前から自覚していたはず。

「可能性八、浅倉陽子も望月鷲も天野恭子が作り上げた架空の存在で、本当に存在していない」

それは可能性三と四でかぶっている。

「可能性三と四は浅倉陽子と望月鷲を知っていた上での創造。可能性八は全てが私の妄想なのでダブルブッキングはない」

段々と考える力が薄れていく。

「注釈一、本編一から十六までをジズ＝フライマが体験していたが、人格の入れ替わりに伴って後半は消滅。オリジナルとほぼ融合」

何が、

「注釈二、7月27日と8月5日、8月15日、8月16日を浅倉陽子が体験。しかし後半はジズがオリジナルとの融合のせいで、非現実的な記憶を処理する羽目になる」

どうなっている。

「注釈三、本来、望月鷲と浅倉陽子は別々の要素を持ち合わせた人格。自分では出来ないことをほかの人格で行なっていたが、人格交換によってオリジナルを見失い、自殺という形で強制的に人格を殺

した」

.....。

「注釈四、全てを知っていたのは坂城陽海である。同時に、可能性九、由衣人と坂城陽海は同一人物である」

坂城君と由衣人が？

「可能性十、由衣人は全てを知っていたはず。しかし、彼自身は2002年時の人間である」

わからない。

「そして、彼も私の妄想の一つである……という可能性十一。どの可能性が浅倉さんにとって好都合？」

そんなの、わからない。

「問題、浅倉さんの世界はどこにあるのでしょうか。どの歴史話にオリジあったのでしょうか」

そんなの、

「可能性十二、私（達）はフィクションである」

第三十二話 「可能性十二、私（達）はフィクションである」（後書き）

以上、完結。そして注釈的な話です。

感想の中に「注釈的な話を」、という希望がありましたので書きました。

が、私にはこれ以上の注釈をすることができませんので許していただきたいです。

お読みいただきありがとうございます。
それでは。

if 2002年(前書き)

10/19 更新

完結したのに投稿してもいいのだろうか。

if 2002年

「PTSD……と、私は判断します」

「それは 多重人格、という症状ですか？」

「ええ、それもあります。人間は強い衝撃を受けるとそれを緩和させるため、人間の機能が一時的に麻痺を起こし、一時的に現状に適応させようとします。そのため事件前後の記憶を失つたり、記憶の捏造 といったものを人間は無意識に行なってしまう」

「陽子は……いや、お嬢様今……」

「はい。陽子様にとって、驚様が亡くなった事実がとても大きかったでしょう。ですからあのように男言葉を使って真実それを補っている と考えます」

「驚様がいない世界など、想像できないのかもしれませんが」と医者は付け加えて言った。

坂城由衣人さかき ゆいと。2002年時で17歳。

彼は浅倉家の執事 付き人である。体格は、そう大柄ではということでもないが、それでいてがっしりと鍛えた、一八〇センチという身長を所持している男だ。

坂城家は代々浅倉家の使用人を務めてきた。

それはもう、ざつと五百年間は続く大きな系譜だ。そして、由衣人は次期十七代目浅倉家当主、浅倉陽子の付き人である。

坂城家と浅倉家は五百年前からお互いの子を許嫁　　として婚姻させてきた。

浅倉家の当主は代々女性。

坂城家の当主は代々男性。

当主同士が婚姻し、子を生み、その子が女ならば浅倉家が育て、男ならば坂城家が養子とし、生まれた男の子を浅倉の付き人として教育し、奉公させる。

わかりやすく言うと、浅倉陽子の兄である由衣人が陽子の付き人となるわけだ。

これは浅倉と坂城の秘密であり、当主になるまで秘密である。

また、坂城家の当主は望月家の女と契、能力の優れた男の子を坂城の当主としてきた。

望月家も浅倉、坂城と並ぶ由緒ある家系だ。

「治る見込みは　　」

「その必要はいらん」

由衣人は驚き振り向く　　と同時に圧倒的な体術によって組み倒され、腕や脚からは《ゴギユ》という鈍い音が響く。

「……痛っ！！」

由衣人を倒したのは坂城家当主、坂城総二郎。

「うむ。何も問題はない」

隣には浅倉家当主、浅倉陽央美が控え。

「私たちの代で完成とは……僥倖、と言えるでしょう」

二人から少し後ろに離れて望月家当主、望月鷲之介がいる。

「当主様方！ 一体それはどういうことですか！！」

由衣人は床に叩きつけられながらも叫んだ。

「五月蠅い、下郎が。命令だ……口を開くな」

「……！！」

暗示。

浅倉家の暗示はとても強く、ただならぬ命令力を持つ。並大抵の人間なら、思考が停止するほどの威力だ。

「当主候補が死んだ事は現当主にとって悲しいことですが……まあこの結果なら良しとしましょう。さて 先生、陽子ちゃんにもう治療は必要ありません」

「あ、あ……あ」

「ですから、あなたももう、必要ありません」

「医者はもはや何も言うことはできない。由衣人もただただ身動きが取れず、口も開かず、見ていることしかできない。」

「それでは御退場願います」

「……！！」

「それを阻止することも」「やめろ」とも言うことができずにそれは行われた。」

望月家の当主が指を振るっただけ。

ただそれだけで医者之首からは血が吹き荒れることとなった。

誰かのため息一つ。そして携帯電話を押す音。

「私だ。今から指定する。そこを場所を焼き払え。……ああ、建物が崩れるぐらい大きな火事にしてやれ」

中年の軽い声。

「陽子は今どこにいる」

貫禄のある野太い声。

「浅倉の屋敷だ。今は幽閉しているところだが……直じまに外に出せる

だろっ」

女にしては低い声。坂城の当主は頷いただけだった。

「……………由衣人、お前は坂城の人間となった。勝手な行動は許さん」

「……………はい、当主様」

ドン！

文字にするとこんな感じの衝撃が彼の体を襲う。

蹴られた体が家具を壊しながら数メートル飛び、壁にぶつかる。衝撃で壁は砕けた。彼の体は呼吸を欲しがり、喘ぐ。

「証拠隠滅の為、これからここを燃やす。私たちはもう出るが、由衣人、お前も後から脱出しろ。出来なければ死ね。坂城の家に役立つはずはいらん」

「浅倉を守れぬ者に付き人は必要ないからな」

クツクツと笑いながら三人は去っていった。

そうして坂城由衣人は自身の無力さを嘆き、騒がしい音を聞きながら意識を手放した。

2002年

if 2002年(後書き)

誰かの過去話です。

あくまでもifですのでならっと読まれることをおすすめします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2844v/>

夏色カフェテリア

2011年10月21日12時22分発行